

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第104集

東松山市

ちご さわ きた
児沢北遺跡

県立平和資料館関係埋蔵文化財発掘調査報告書

1991

財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

卷頭凶版



藏骨器

序

児沢北遺跡は、比企丘陵のほぼ中央にある物見山に位置し、付近一帯には東松山市指定史跡の足利基氏館跡や、古くから岩殿観音として多くの信仰を集めてきた正法寺があり、この地がかねてより文化が栄えた地域であることが知られていました。また近年では、西に隣接する鳩山町において、古代の一大窯跡群が発掘調査され、比企地域一帯が武蔵の国のなかで重要な役割を担ってきたことが明らかになりました。

この遺跡の一部が県立平和資料館の建設用地にあたることになり、埋蔵文化財の取り扱いについて関係機関の協議の結果、当事業団が発掘調査を実施して記録保存することになりました。丘陵先端のほぼ全域を調査したところ、奈良時代から平安時代にかけての土壇21基や蔵骨器などが発見され、遺構の状況等から古代の墓地であったことが推察されます。

本書は、これらの発掘調査の成果をまとめた報告書であり、今後、埋蔵文化財保護に関する教育・普及さらに学術研究の資料として活用いただければ幸いです。

刊行にあたり、この発掘調査に関し諸調整をしていただきました埼玉県教育局文化財保護課、ならびに発掘調査から本書の刊行に至るまで御協力いただきました埼玉県県民部県民総務課、さらに東松山市教育委員会および関係者各位に対し、厚く御礼申し上げます。

平成3年2月

財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団
理事長 荒井修二

例 言

1. 本書は県立平和資料館建設工事に関わる東松山市岩殿字児沢241番地に所在する児沢北遺跡の発掘調査報告書である。
2. 発掘調査は埼玉県教育局指導部文化財保護課の調整をへて、埼玉県県民部県民総務課の委託により、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団が実施した。
3. 発掘調査は平成2年6月28日から平成2年10月31日、整理・報告書作成は平成2年11月1日から平成3年3月30日まで実施した。
4. 発掘調査は高崎光司・宮瀧交二・野中仁、整理・報告書作成は高崎が実施した。発掘調査・整理・報告書作成の組織は2ページに示した。
5. 発掘調査時の写真は高崎・宮瀧・野中が撮影し、遺物写真は高崎が撮影した。
6. 挿図の縮尺は、個別の遺構図1/40、遺物実測図1/4を原則とした。
7. 本書で用いた遺構の略号は以下のとおりである。
SK：土壙 SP：ピット SX：性格不明遺構
8. 本書の執筆は、第1章第1項を埼玉県教育局指導部文化財保護課に委託し、第5章を除くその他の章は高崎が担当した。
9. 遺跡の基準点測量ならびに航空写真・測量は株式会社パスコ、遺構内覆土の科学分析はパリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。分析結果については第5章に掲載した。
10. 本書の編集は資料部が監修した。

目 次

序

例言

I	調査の概要	1
1	調査に至るまでの過程	1
2	発掘調査・整理・報告書刊行の組織	2
II	遺跡の立地と環境	3
III	遺跡の概観	8
IV	遺構と遺物	10
1	土壌	10
2	特殊土壌	17
3	ピット	17
4	火葬墓	18
5	土器集中遺構	20
V	自然科学的分析	21
VI	結語	33

挿図目次

第1図	周辺の遺跡	4、5	第15図	第19号土壌	16
第2図	遺跡周辺の地形図	6、7	第16図	第20号土壌	16
第3図	基本土層図	8	第17図	特殊土壌	17
第4図	調査区全測図	9	第18図	第1・2・3・4号ピット	18
第5図	第1号土壌	10	第19図	火葬墓	19
第6図	第2号土壌	10	第20図	蔵骨器	19
第7図	第3号土壌	11	第21図	土器集中遺構	20
第8図	第4・5号土壌	11	第22図	土壌試料採取地点土層断面図	22
第9図	第6号土壌	11	第23図	第1地点基本土層模式図	23
第10図	第7号土壌	12	第24図	リン酸・カルシウム含量の深さ別変化	27
第11図	第8・9・10・11・12号土壌	12	第25図	植物珪酸体組成	30
第12図	第13号・14号・15号土壌	14	第26図	東松山市教委調査出土土器	33
第13図	第16号・17号土壌	15	第27図	比企周辺の古代蔵骨器	35
第14図	第18号土壌	15	第28図	二ノ谷遺跡の火葬墓と土壌墓	36

図版目次

図版1	第1号土壌	第2号土壌	図版12	1号ピット	2号ピット
図版2	第3号土壌	第4・5号土壌	図版13	3号ピット	4号ピット
図版3	第6号土壌	第7号土壌	図版14	土器集中遺構	
図版4	第8号土壌	第9号土壌	図版15	蔵骨器出土状況	
図版5	第10号土壌	第11号土壌	図版16	蔵骨器出土状況	
図版6	第12号土壌	第13号土壌	図版17	第20号土壌土壌サンプリング	遺構実測
図版7	第14号土壌	第15号土壌	図版18	航空写真測量	遺跡遠景
図版8	第16号土壌	第17号土壌	図版19	出土遺物	
図版9	第18号土壌	第19号土壌	図版20	植物珪酸体電子顕微鏡写真	
図版10	第20号土壌	第8～12号土壌	図版21	材同定電子顕微鏡写真	
図版11	特殊土壌				

表

表1	出土炭化材の同定試料一覧	表4	S K-20 リン・カルシウム分析結果
表2	第1地点 リン・カルシウム分析結果	表5	植物珪酸体分析結果
表3	S K-1 リン・カルシウム分析結果		

I 調査の概要

1 調査に至るまでの経過

埼玉県では、多様化する学習機会の充実と推進を図るため各種施設の建設を進めている。平和資料館の建設は、県民の平和意識の高揚を目的として、埼玉県県民部によつて建設事業が計画された。こうした開発事業に対応するために県教育局指導部文化財保護課では、開発関係部局と各種の事前協議を行ない、文化財保護と開発事業の円滑な調整を進めているところである。

平成元年10月30日付け県総第428号で、県民総務課長から文化財保護課長あて「仮称平和資料館建設事業地内における埋蔵文化財の所在及び取扱いについて」照会があった。

これに対し文化財保護課では、埋蔵文化財所在確認調査を実施し、その結果に基づき、平成2年1月23日付け教文第1355号により次のとおり回答した。

1. 埋蔵文化財の所在

名 称	種 別	時 代	所 在 地
児 沢 北 遺 跡 (34-241)	集 落 跡	奈 良 時 代	東松山市岩殿241ほか

2. 取扱い

上記埋蔵文化財は現状保存することが望ましい。計画上やむを得ず現状変更する場合には文化財保護法第57条の3の規定により、事前に文化庁長官へ埋蔵文化財発掘通知を提出し、記録保存のための発掘調査を実施すること。

なお、発掘調査を実施する場合は当課と協議すること。

この確認調査の成果に基づいて、県民総務課と文化財保護課は上記埋蔵文化財包蔵地の保存策について協議を重ねたが、平和意識高揚を目的とした建設計画でもあり、計画の変更は不可能と判断されたため、やむを得ず記録保存の措置を講ずることになった。

発掘調査の実施については、県民総務課、文化財保護課並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団の三者で事前協議を行い、協議が整ったため、その旨を文化財保護課から平成2年3月1日付け教文第1531号により県民総務課長並びに財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長あて通知した。

発掘調査の実施に先立って、埼玉県知事から文化財保護法第57条の3第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘通知が提出され、県教育委員会教育長から県知事あて平成2年5月22日付け教文第3-65号で文化庁の指導に基づく指示を通知した。

また、財団法人埼玉県埋蔵文化財調査事業団理事長から同法第57条第1項に基づく埋蔵文化財発掘調査届が提出され、県教育委員会教育長から文化庁長官へ平成2年5月22日付け教文第2-91号で進達した。

発掘調査は、約9,600㎡を対象として平成2年7月から開始された。

(文化財保護課)

2 発掘調査・整理・報告書作成の組織

a 発掘調査（平成2年度）

主体者（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二
副理事長 早川智明
常務理事兼
管理部長 古市芳之
理事兼
調査部長 吉川國男
資料部長 栗原文藏

管理部

庶務課長 高田弘義
主査 松本晋
主事 長滝美智子
経理課長 関野栄一
主任 江田和美
主事 本庄朗人(7月～9月)
主事 菊地久(10月)
主事 斉藤勝秀

調査部

副部长 塩野博
調査第四課長 鈴木敏昭
主任調査員 高崎光司
調査員 宮瀧交二

b 整理・報告書作成（平成2年度）

主体者（財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

理事長 荒井修二
副理事長 早川智明
常務理事兼
管理部長 古市芳之
理事兼
調査部長 吉川國男
資料部長 栗原文藏

管理部

庶務課長 高田弘義
主査 松本晋
主事 長滝美智子
経理課長 関野栄一
主任 江田和美
主事 菊池久
主事 斉藤勝秀

資料部

副部长兼
資料整理 増田逸朗
第一課長
主任調査員 高崎光司

II 遺跡の立地と環境

見沢北遺跡は東松山市と鳩山町の境界にあたる物見山丘陵に位置し、南東に突き出た尾根上にある。標高は120mである。南は丘陵に遮られるが、北は松山台地、東は高坂台地さらには、遠く荒川の沖積平野を望むことができる。遺跡はこの痩せた丘陵尾根上で、長さ約100m幅約10m程の、わずかに平地となっている範囲を中心として確認することができた。

調査に入る前の現地は、高さが20m前後の雑木からなる山林であり、市町村境と重なる幅約4mの山道が尾根筋に沿って東西に走っていた。傾向として、道の北側斜面には山桜、櫟等が多く、南側斜面はほとんどが赤松で下草の繁茂が著しかった。日当たりなどの自然条件の違いによるものと思われるが、大部分が自然林と考えられる。遺跡の東側の1段低い丘陵には、大東文化大学とこども動物自然公園があるが、その丘陵とのあいだには深い谷が形成されており、当遺跡とは隔絶されている。したがって平野部から当遺跡に至る経路は小規模な山道であったと推定される。

遺跡から続く尾根の先端には120基からなる物見山塚群があり、北西には中世にその造営が遡れる寺院、正法寺（岩殿観音）がある。北東方向には、現在はゴルフ場となっているが、鎌倉公方足利基氏ゆかりの館跡がある。「新編武蔵風土記稿」では、基氏がこの館に本陣を置き、芳賀高貞と岩殿山において戦ったことが記されている。遺跡周辺は南北朝動乱の舞台でもあった。

古代における歴史的環境としては、遺跡の西、現在の鳩山町を中心に広がる南比企の大窯跡群が第一にあげられよう。当遺跡から出土している須恵器も明らかにここから供給されている。集落遺跡は、松山台地の南縁や高坂台地東縁および、越辺川を隔てた旧入間郡内では、毛呂台地の北縁に多く分布している。このうち地理的にも時代的にも見沢北遺跡に近いのは、舞台、根平、緑山遺跡であるが、当遺跡の成り立ちに直接関連すると考えられる遺跡は特定しがたい。だが、物見山塚群内で1軒だけ発見された住居跡などは、当遺跡を考えるうえで、注意すべき存在であろう。



遺跡全景

周辺の主要遺跡（奈良・平安時代）

- | | |
|----------|------------|
| 1 児沢北遺跡 | 23 大塚原遺跡 |
| 2 金平遺跡 | 24 雷遺跡 |
| 3 東落合遺跡 | 25 毛蔵寺遺跡 |
| 4 原遺跡 | 26 小用廃寺跡 |
| 5 狐塚遺跡 | 27 西戸丸山遺跡 |
| 6 篩新田遺跡 | 28 松の外遺跡 |
| 7 岩の上遺跡 | 29 伴六遺跡 |
| 8 雉子山遺跡 | 30 神明台遺跡 |
| 9 原山遺跡 | 31 稻荷前遺跡 |
| 10 附川遺跡 | 32 桑原 B 遺跡 |
| 12 山王裏遺跡 | 34 金井遺跡 |
| 13 中原遺跡 | 35 若宮遺跡 |
| 14 番清水遺跡 | 36 まま上遺跡 |
| 15 下山遺跡 | 37 築地遺跡 |
| 16 代正寺遺跡 | 38 花影遺跡 |
| 17 物見山遺跡 | 39 山田遺跡 |
| 18 大平遺跡 | 40 勝呂廃寺跡 |
| 19 舞台遺跡 | 41 附島遺跡 |
| 20 根平遺跡 | 42 宮町遺跡 |
| 21 緑山遺跡 | 43 若葉台遺跡 |
| 22 立野遺跡 | |

- A 将軍沢・亀の原地区窯跡群
- B 須恵・竹本地区窯跡群
- C 泉井地区窯跡群
- D 熊井地区窯跡群
- E 大橋地区窯跡群
- F 奥田地区窯跡群
- G 鳩山窯跡群
- H 赤沼地区窯跡群





第1図 周辺の遺跡(1/50,000)



東松山市

岩殿

正法寺

物見山

大平遺跡

山崎女子短期大学
造形大学

石坂

比企丘陵
自然公園

公園



第2図 遺跡周辺の地形図

★蔵骨器出土地点

0 200 m

III 遺跡の概観

発掘は丘陵の頂部平坦面を中心に調査区を設定し、重機および人力による表土除去を実施した。北側の斜面は一部が崩れているため、調査区から除外した。また、東側の標高113m～106mの急斜面には可能な限りトレンチを入れて遺構検出を行ったが、登り窯等の遺構は確認できなかった。

調査区内における表土の形成は極めて浅く、深さ約15cmで礫混じりの地山層、いわゆる物見山礫層に至る。遺構の検出はこの地山の上面において行った。検出された遺構は、土壌（SK1～20）21基、特殊土壌（SK21）1基、ピット（SP1～4）4基、火葬墓（SP5）1基、土器集中遺構（SX1）1基である。出土遺物は蔵骨器と図示不可能な若干の須恵器、土師器の小破片だけである。遺物の属する年代は、奈良時代と推定される。中世・近世に下る遺物は皆無で、近年のゴミ穴が数か所に掘られていたが、正法寺関連の遺構は検出されていない。

土壌はすべてに、炭化物、焼土が含まれていた。壁も赤く焼けしまっている例が多い。SK1～SK15とSK16～SK20の2群に分かれている。前者は丘陵頂部の平場にあり、後者は斜面部にあるが、両者は大きな弧を描いて列状に群を形成しているようである。列の幅は約7mで、弓なりの弧の中心は丘陵の南側になる。ただし、これは必ずしも尾根筋とは重ならない。

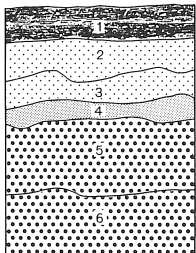
特殊土壌は他の土壌と比べて形状が異質であり、掘られた場所も一連の土壌群からはかけ離れている。斜面を利用しているので、なんらかの焼成に関わる遺構かもしれない。

ピットは丘陵斜面の下位に検出されている。いずれも掘り込みが浅く、遺構の検出は困難を極めた。表土掘削時には調査区北側の急斜面にも2、3基確認されたが、遺構精査以前に台風の被害をうけ、地山面の土が流失してしまい、遺構も消滅してしまったことは残念でならない。

火葬墓は、遺構の形態としてはピットと変わらない。そこに納められていた遺物は、胎土に針状物質を含むいわゆる鳩山窯跡群産の須恵器甕と坏、蓋の3点セットである。骨片等は検出されていないが、蔵骨器として間違いなさだろう。

土器集中遺構は明確な掘り込みのある遺構ではない。便宜上このように称することにする。火葬墓とともに、土壌群の弧の内側にあることは興味深い。相互の関連が予想される。

当事業団の調査と並行して、東側丘陵中段の平場において東松山市教委が発掘調査を実施した。一部がすでに破壊されていたが、奈良時代の住居跡が検出されている。まだ調査が継続中なので詳細は不明だが、当遺跡の成り立ちと密接な関係があることが予想される。

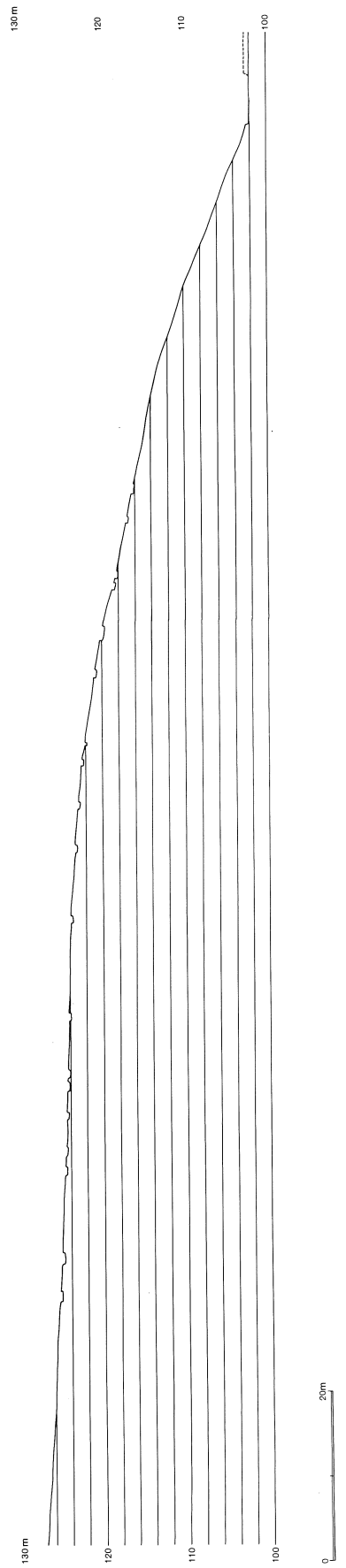
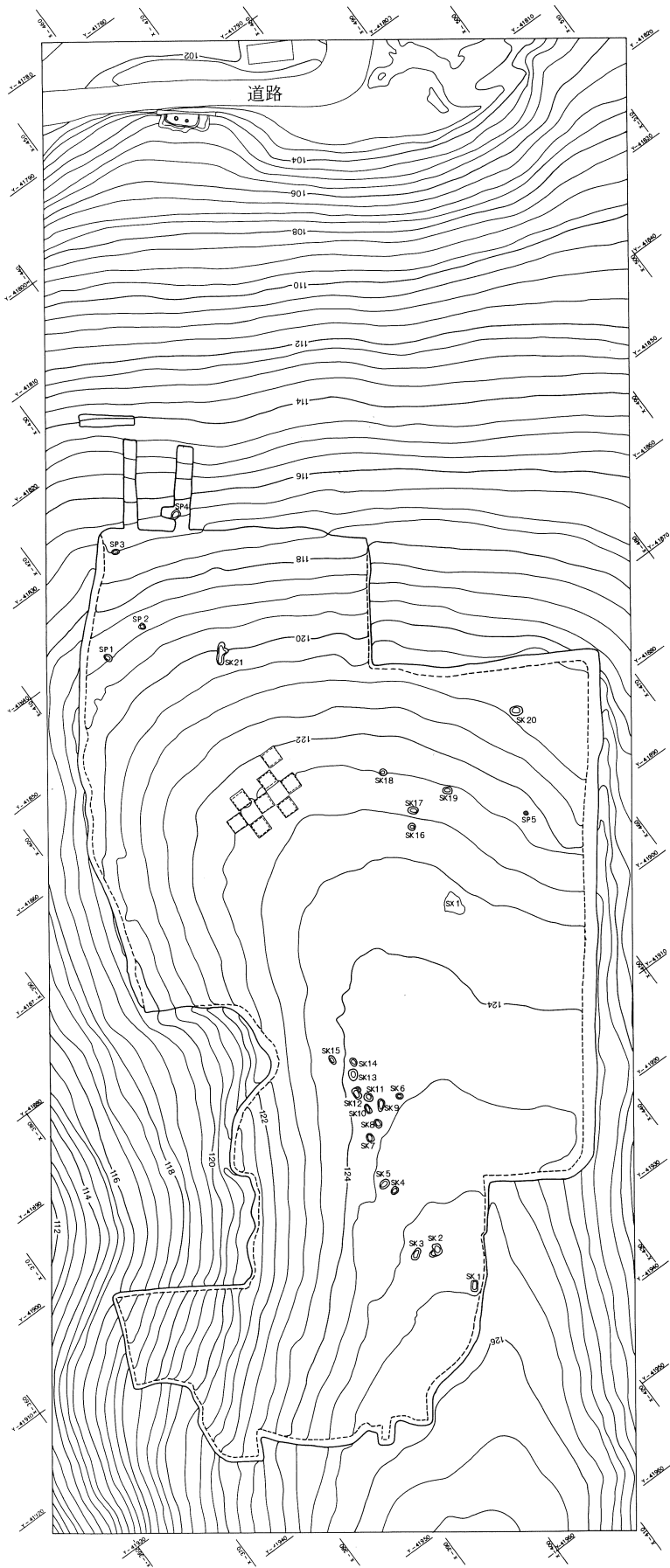


基本土層

- | | |
|----------|-----------------------|
| 1 表土 | 暗褐色を呈し、微小礫を含む |
| 2 赤褐色土 | ローム粒、5cm大の礫を少量含む |
| 3 赤褐色土 | 15cm大の礫を多量含む |
| 4 赤褐色砂質土 | 黄橙色の砂礫を多く含む |
| 5 黄色砂礫層 | 未発達な砂岩層にロームの混入がある |
| 6 黄色砂礫層 | ロームの混入は少ない、30cm大の礫が混入 |

0 1m

第3図 基本土層図



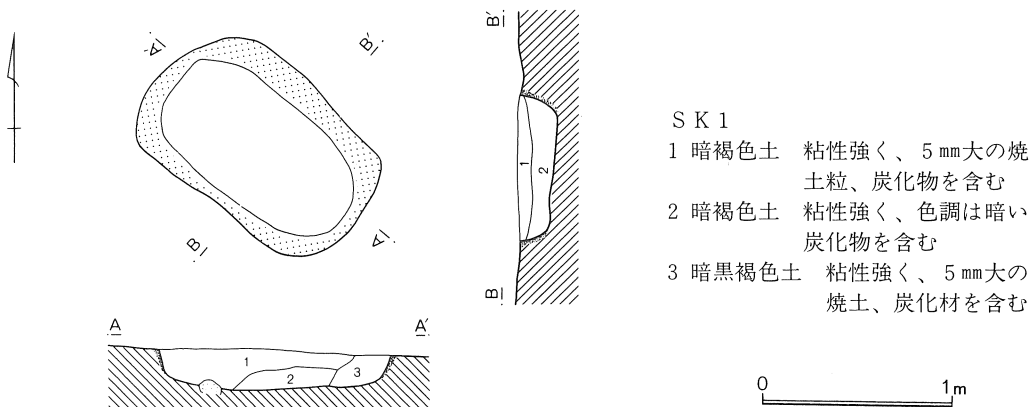
第4図 調査区全測図

IV 遺構と遺物

1 土壌

第1号土壌 (第5図)

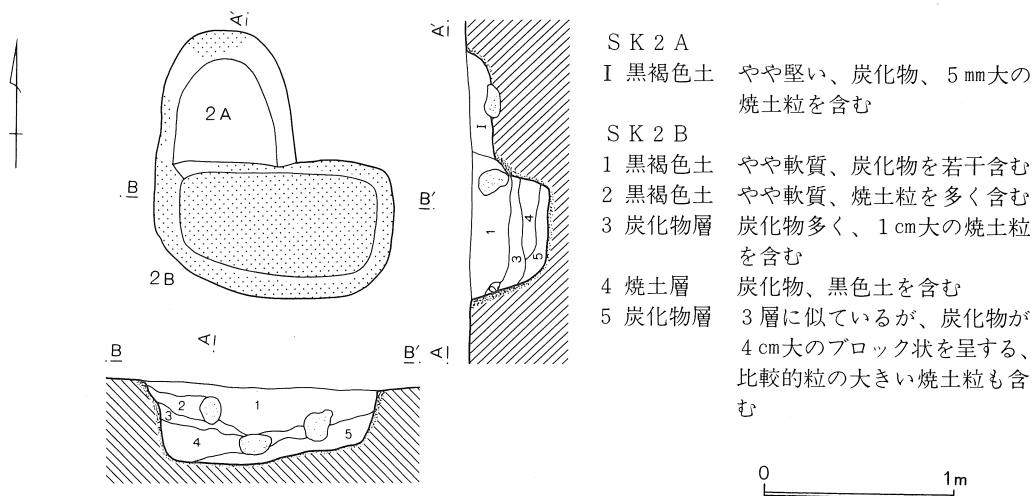
調査区の西端の位置で検出された。平面形は北のコーナーを除き、ほぼ均整のとれた方形を呈している。掘り込みも比較的垂直に近い。規模は長さ125cm、幅78cm、深さ21cmである。壁は全面が焼けており、赤色に硬化した部分は厚さ1.5cmに及ぶ。覆土は上層に炭化物、焼土が多く含まれていた。リン・カルシウム分析のために土壌サンプリングを行った。出土遺物はない。



第5図 第1号土壌

第2 A・B号土壌 (第6図)

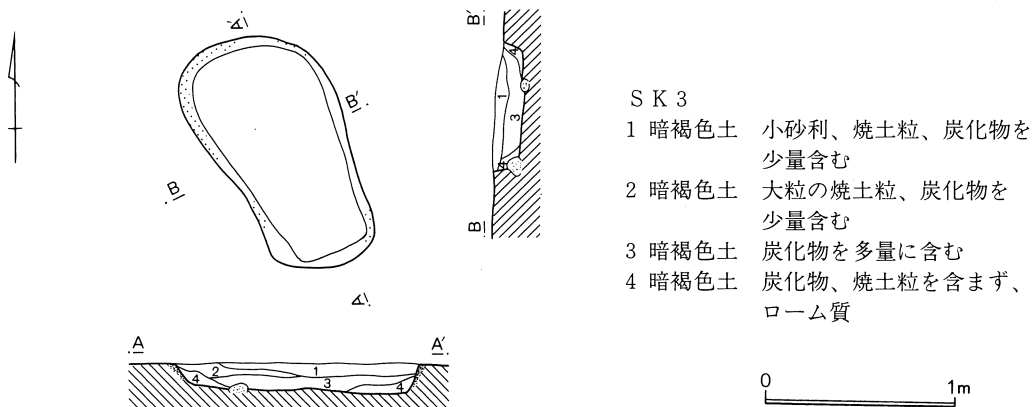
二つの土壌が重複して検出された。古い土壌をSK 2 A、新しい土壌をSK 2 Bと称することにする。2 A号土壌は長軸を南北にあわせている。規模は長さ不明、幅68cm、深さ23cmである。2 B号土壌は2 A号土壌に直行するように、長軸を東西にとっている。規模は長さ131cm、幅70cm、深さ40cmである。2 B号土壌は底面が比較的フラットで壁とともによく焼けている。対して、2 A号土壌の底面は傾斜しており、壁もあまり焼けていない。いずれも出土遺物はない。



第6図 第2 A・2 B土壌

第3号土壙 (第7図)

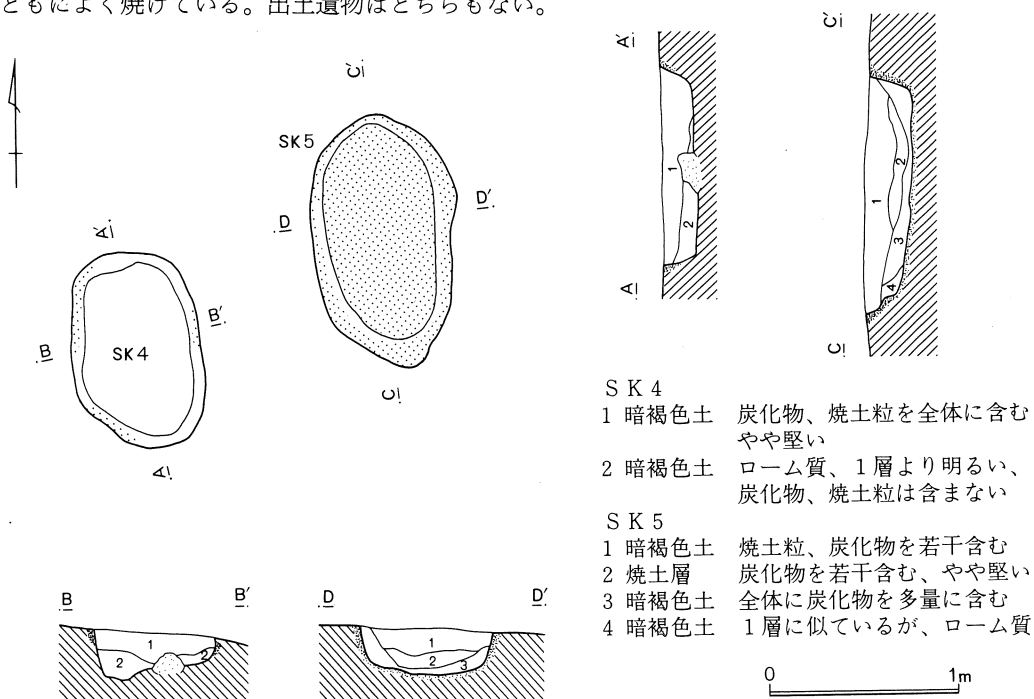
北のコーナーが若干膨らんでいる。規模は長さ128cm、幅67cm、深さ15cmである。比較的浅く、覆土には炭化物が多く含まれ、特に東壁付近に貼りつくように検出された。底面には地山の礫が露出しているが、焼けているものも多い。その礫の間にも多くの炭化物と焼土粒が詰まっていた。出土遺物はない。



第7図 第3号土壙

第4号・5号土壙 (第8図)

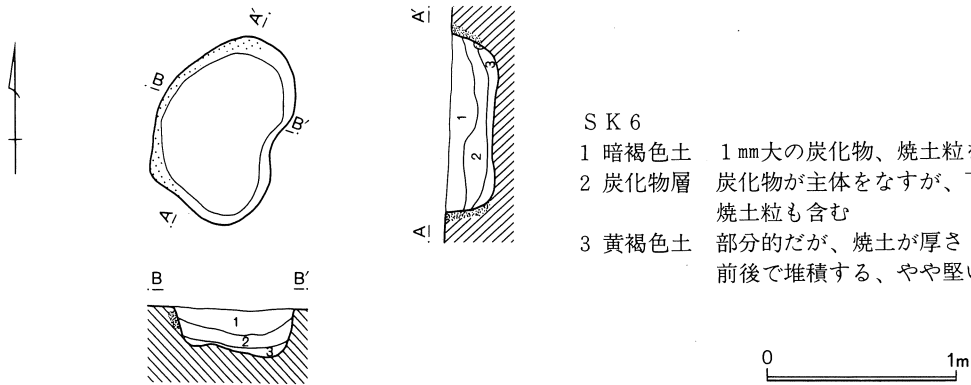
第4号土壙と第5号土壙は芯芯で約1m40cmときわめて近接している。長軸も平行しており、同じ時期に作られた可能性が高い。規模は4号土壙が長さ103cm、幅70cm、深さ19cm、5号土壙が長さ125cm、幅71cm、深さ24cm。平面形はいずれも整っていない。5号土壙は、底面がフラットで壁とともによく焼けている。出土遺物はどちらもない。



第8図 第4・5号土壙

第6号土壙 (第9図)

平面形は整った方形を呈していないが、掘り込みは深く、壁は直立する。規模は長さ93cm、幅65cm、深さ23cmである。底面はほぼフラットで、自然礫の露出はない。西壁がよく焼けており、炭化物は、東西の壁際の南側に多くみられた。出土遺物はない。



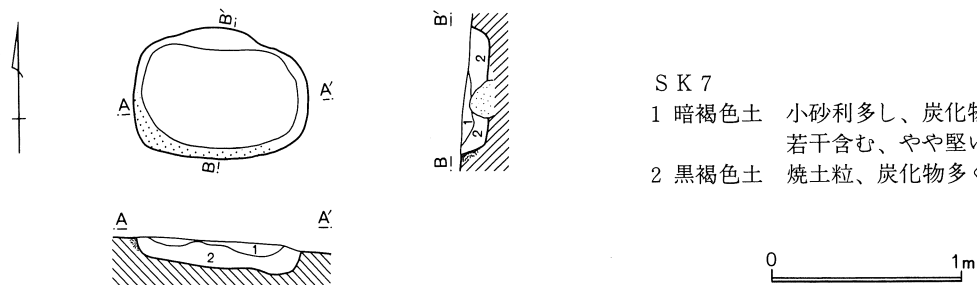
S K 6

- 1 暗褐色土 1mm大の炭化物、焼土粒を含む
- 2 炭化物層 炭化物が主体をなすが、下位に焼土粒も含む
- 3 黄褐色土 部分的だが、焼土が厚さ1cm前後で堆積する、やや堅い

第9図 第6号土壙

第7号土壙 (第10図)

平面形は端整な長方形を呈する。長軸はほぼ東西方向をとる。規模は長さ89cm、幅67cm、深さ14cmである。掘り込みは浅い。底面はフラットで地山面と同様、若干東に下がっている。わずかに、南壁が焼けている。出土遺物はない。



S K 7

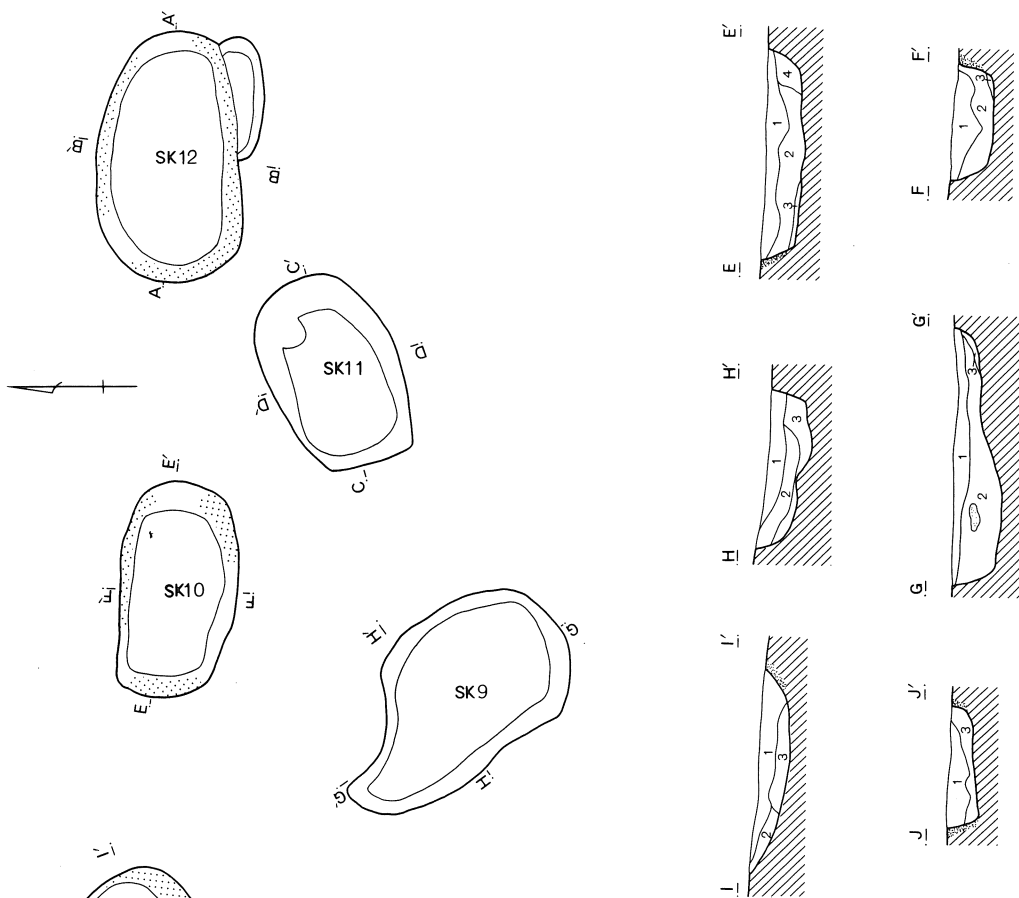
- 1 暗褐色土 小砂利多し、炭化物を若干含む、やや堅い
- 2 黒褐色土 焼土粒、炭化物多く含む

第10図 第7号土壙

第8号・9号・10号・11号・12号土壙 (第11図)

5基が近接して掘られている。このうち10号土壙と12号土壙、8号土壙と11号土壙は長軸の方向を揃えている。9号土壙の平面形が若干異なることを除けば、いずれもほぼ同規模である。

8号土壙は長さ107cm、幅64cm、深さ16cm、若干浅めだが、壁はよく焼けている。西側は壁が直立せずゆるやかに傾斜している。9号土壙は北側のコーナーが樹木の攪乱のため不明瞭であった。したがって平面形は不確実な点がある。規模は長さ136cm、幅84cm、深さ25cm。10号土壙の規模は長さ111cm、幅62cm、深さ21cm。炭化物は下層に多く、礫の露出する底面もよく焼けている。壁は北壁が特に激しく焼けていた。11号土壙は長さ103cm、幅68cm、深さ27cm。壁ははっきりとは焼けていない。南東の部分に炭化物が多くみられた。12号土壙は長さ126cm、幅80cm、深さ22cm。焼土粒、炭化物ともにきわめて多い。壁は西と北がよく焼けていた。出土遺物は5基いずれも無い。



S K 8

- 1 暗褐色土 小砂利、炭化物を若干含む
- 2 褐色土 炭化物、焼土粒を多く含む、やや堅い
- 3 黒褐色土 炭化物を多量に含む、やや軟

S K 9

- 1 黒褐色土 小砂利を多く含む、炭化物、焼土粒若干含む
- 2 黒褐色土 8 cm大の礫を含む、炭化物は1層よりも多い
- 3 暗褐色土 2層に似るが、炭化物は含まれない

S K 10

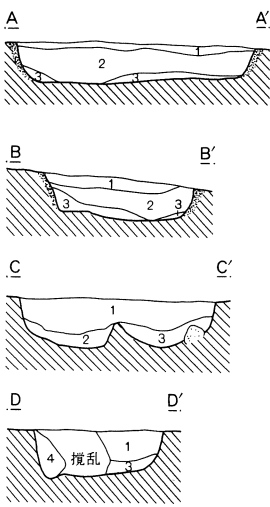
- 1 黒褐色土 炭化物、焼土粒をわずかに含む、小砂利多し
- 2 黒褐色土 1 cm大の炭化物を多く含む、焼土も若干含む
- 3 暗褐色土 やや堅い、炭化物を若干含む
- 4 暗褐色土 3層に似るが、やや軟

S K 11

- 1 黒褐色土 2 cm大の炭化物、焼土を含む、礫を若干含む
- 2 黄褐色土 礫多し、わずかに炭化物を含む、堅い
- 3 暗褐色土 2層に似るが、より暗く、堅い
- 4 黒褐色土 炭化物、焼土粒を若干含む、やや堅い

S K 12

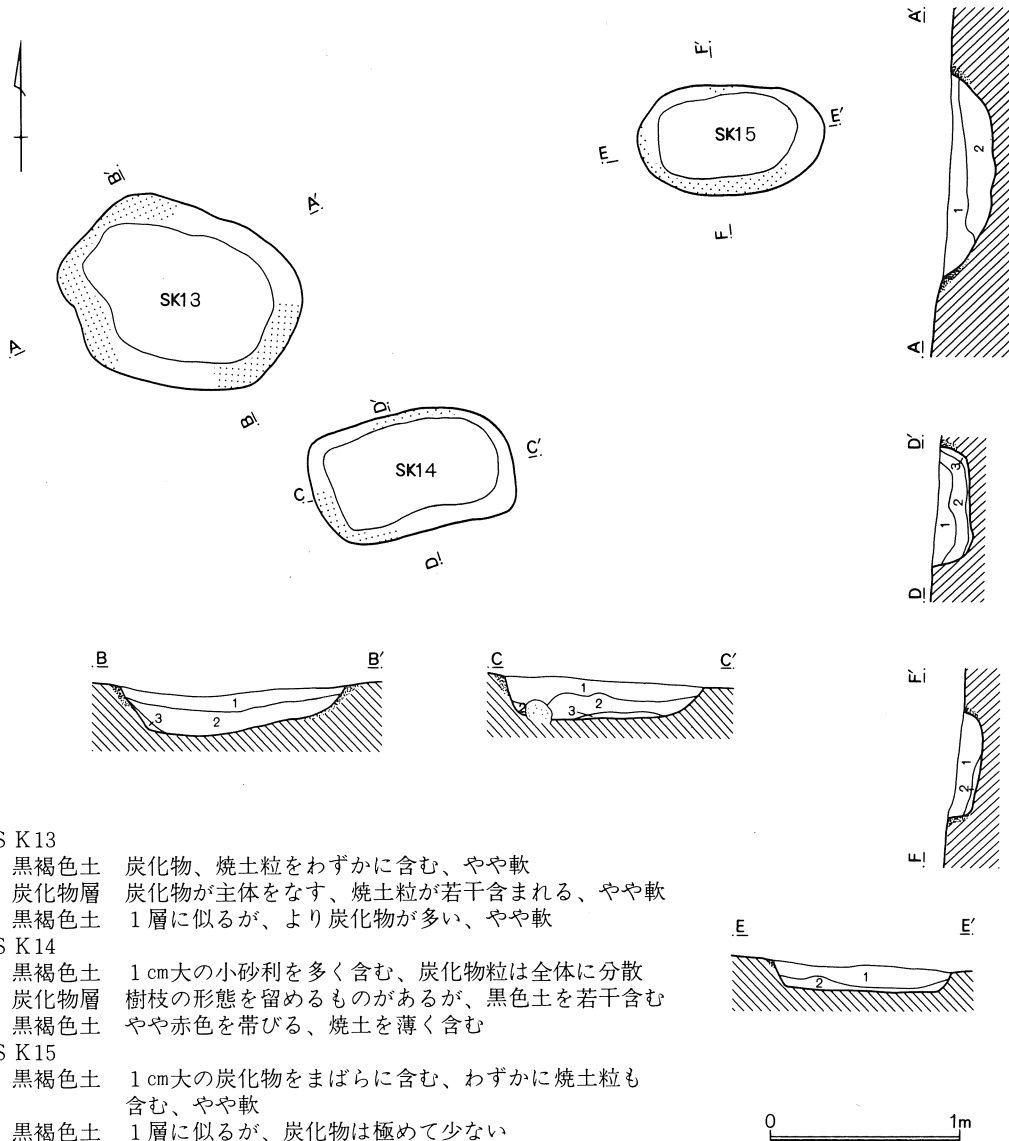
- 1 黒褐色土 小砂利多し、炭化物、焼土粒を若干含む
- 2 黒褐色土 2 cm大の小砂利を多く含む、1 cm大の炭化物、焼土粒を含む、やや堅い
- 3 暗褐色土 4 mm大の炭化物が層状に堆積
- 4 暗褐色土 炭化物、焼土の微細粒をわずかに含む、堅い



第11図 第8・9・10・11・12号土壌

第13号・14号・15号土壌（第12図）

第13号土壌は西側が不整形である。壁は直立せず、ゆるやかに傾斜しているが、西壁と東壁は焼けている。規模は長さ132cm、幅92cm、深さ24cm。底面はフラットで、大きな自然礫が露出している。特に中央のものは壁と同様に焼けている。須恵器坏の一部と思われる微細な破片が出土しているが、あまりにも小破片のため復元や図化をする事は不可能であった。第14号土壌は長さ105cm、幅62cm、深さ21cm。平面形は比較的端整である。底面は若干礫が露出しており、焼けているものもある。東側を除き掘り込みは深く、壁は直立している。炭化物は多く、特に南壁付近に貼り付いていた。出土遺物はない。第15号土壌は長さ95cm、幅56cm、深さ14cm。掘り込みは浅い。南壁がよく焼けていた。これも出土遺物はない。



SK13

- 1 黒褐色土 炭化物、焼土粒をわずかに含む、やや軟
- 2 炭化物層 炭化物が主体をなす、焼土粒が若干含まれる、やや軟
- 3 黒褐色土 1層に似るが、より炭化物が多い、やや軟

SK14

- 1 黒褐色土 1 cm大の小砂利を多く含む、炭化物粒は全体に分散
- 2 炭化物層 樹枝の形態を留めるものがあるが、黒色土を若干含む
- 3 黒褐色土 やや赤色を帯びる、焼土を薄く含む

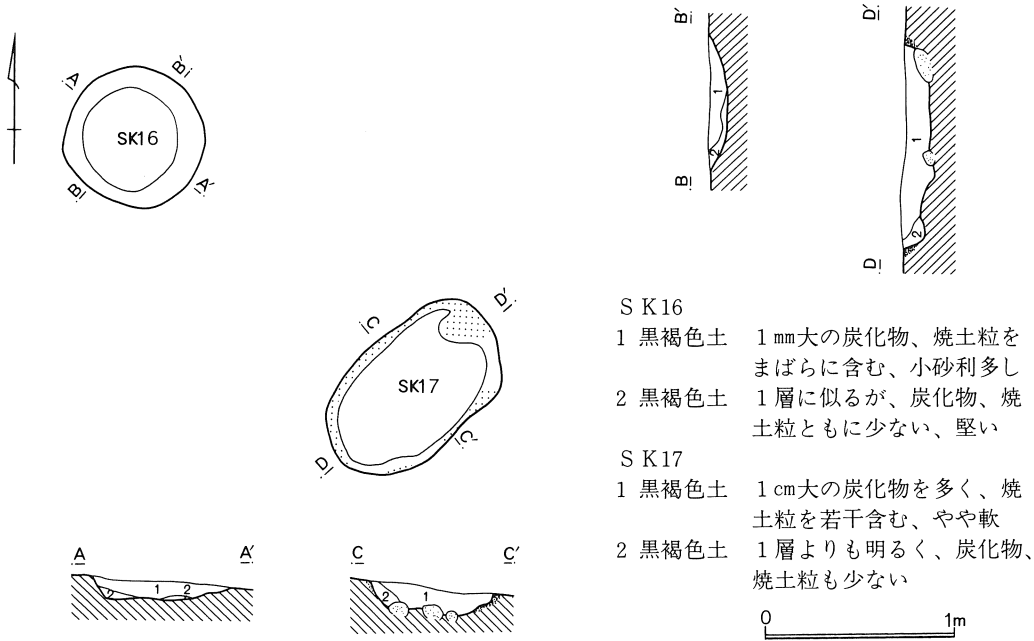
SK15

- 1 黒褐色土 1 cm大の炭化物をまばらに含む、わずかに焼土粒も含む、やや軟
- 2 黒褐色土 1層に似るが、炭化物は極めて少ない

第12図 第13・14・15号土壌

第16号・17号土壇（第13図）

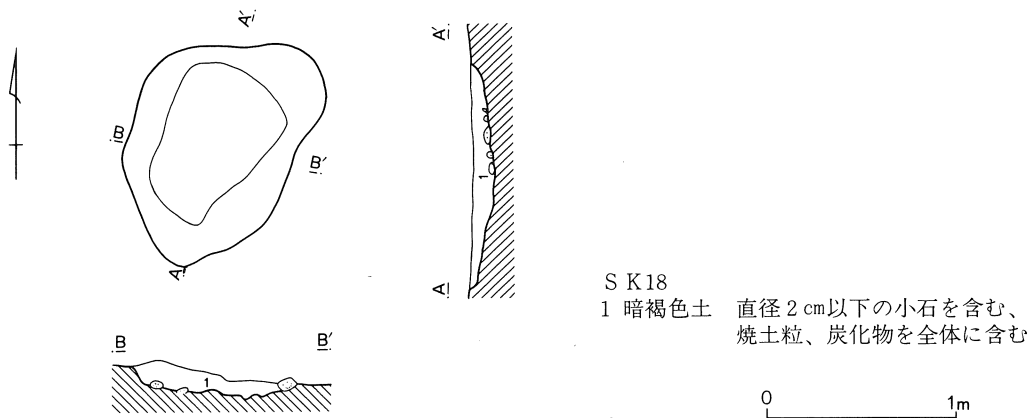
第16号土壇の規模は長さ78cm、幅71cm、深さ10cm。他の土壇と異なり、平面形は隅丸長方形を呈さない。規模も小さいので、後述するピットに近いものかもしれない。山側を除き壁は直立せず、焼け具合も顕著ではない。出土遺物はない。第17号土壇は長さ107cm、幅65cm、深さ17cm。底面は15cm大の自然礫が露出しており、フラットではない。この底面は焼けていないが、壁は山側がよく焼けていた。出土遺物はない。



第13図 第16・17号土壇

第18号土壇（第14図）

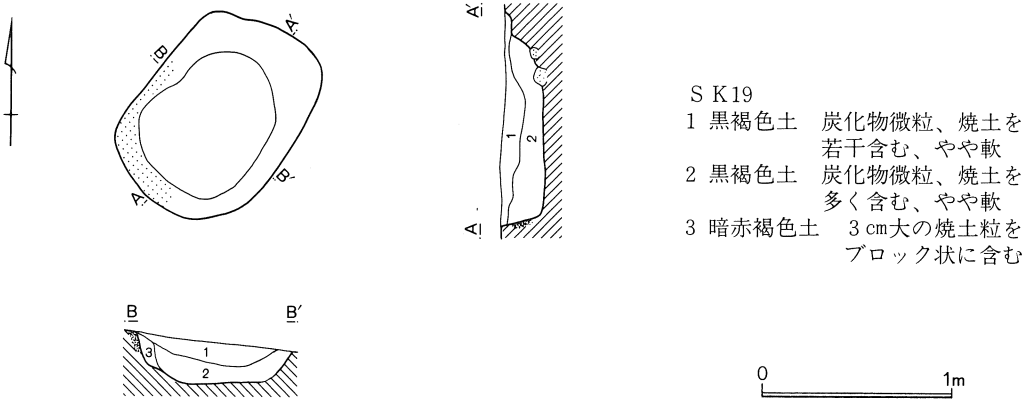
樹根による攪乱が激しく、遺構の検出は困難をきわめた。壁の立ち上がりも不明確であるが、元来は長方形の平面形を呈していたと思われる。規模は長さ120cm、幅91cm、深さ11cm。出土遺物はない。



第14図 第18号土壇

第19号土壙 (第15図)

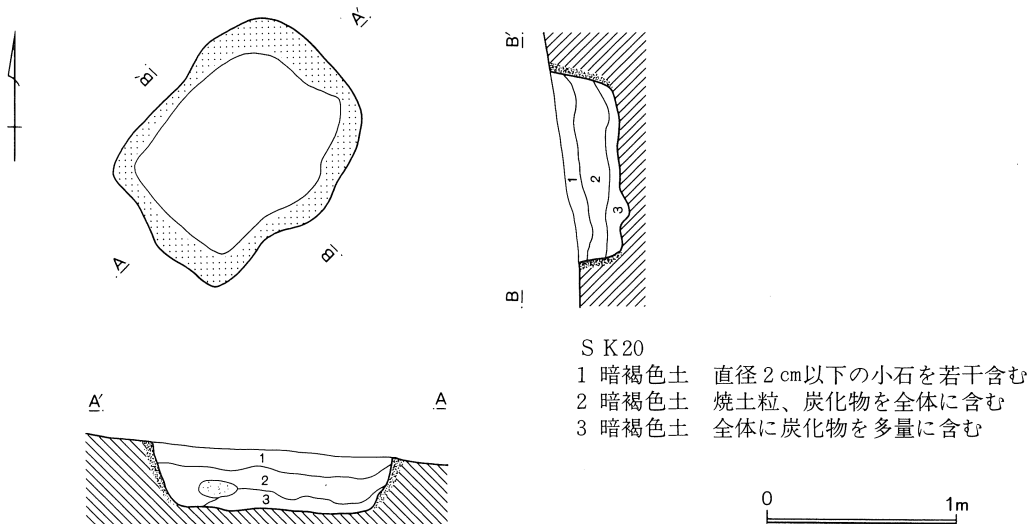
緩やかな斜面に掘られている。平面形は比較的端整で、規模は長さ113cm、幅84cm、深さ22cm。東北壁は傾斜しているが、反対側の西南の壁は直立し、よく焼けている。底面は10cm大の自然礫が多く露出している。炭化物は少ない。出土遺物はない。



第15図 第19号土壙

第20号土壙 (第16図)

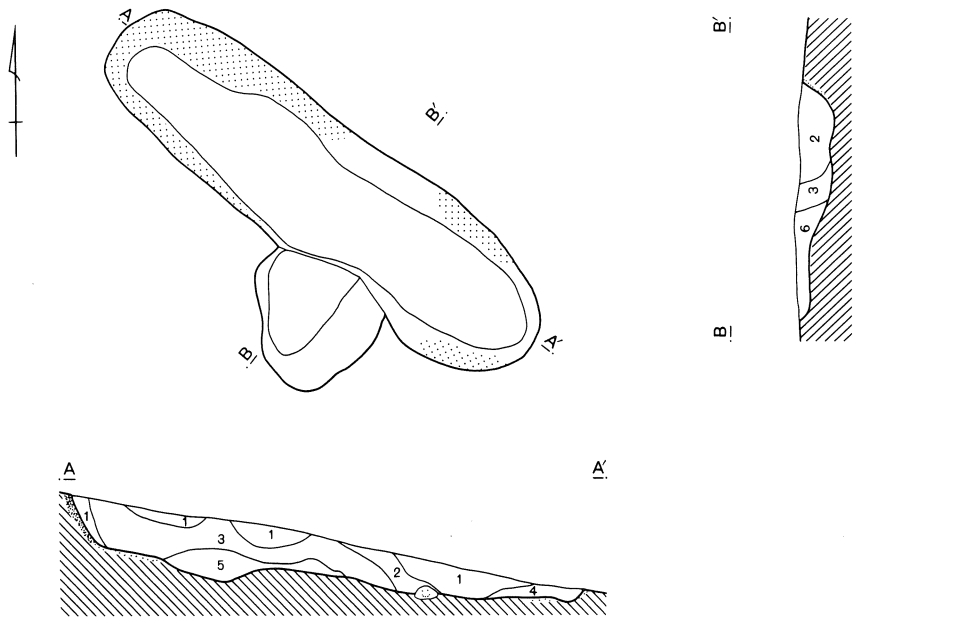
調査区の中では最も東に位置する。標高も一番低く、急斜面に作られている。掘り込みは特に深く、平面形も東側が若干乱れるがかなり端整である。規模は長さ127cm、幅102cm、深さ31cm。長さに対して幅が際立って広い、底面はフラットではあるが、地山と同様、北西から南東方向へかなりの角度で傾斜している。壁は直立し全面が焼けているが、特に山側すなわち北西と北東の壁が激しく、硬化している。第1号土壙とともに覆土の土壌サンプリングを行った。出土遺物はない。



第16図 第20号土壙

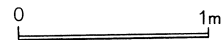
2 特殊土壌 (第17図)

調査区の東斜面に検出された。遺構の頂部から下端部までの標高差は53cmある。規模は長さ273cm、幅71cm、深さ10~31cm。平面形は他の土壌と比べて、非常に細長い。南側に張りだし状の掘り込みがあるが、これは樹根の攪乱の可能性もある。壁は山側が直立しよく焼けているが、他は緩やかで、焼け具合も一定ではない。壁の焼け方は土壌のように固く焼けしまっているのではなく、柔らかい。底面はフラットではなく、凹凸がある。焼土がきわめて多くあったことから、なんらかの焼成遺構とも考えられるが、出土遺物は皆無で、その性格については決定しがたい。



特殊土壌

- | | |
|---------|----------------------------|
| 1 赤褐色土 | ローム崩壊土に1cm大の焼土粒、炭化物を少量含む |
| 2 暗赤褐色土 | 焼土粒、1cm大の炭化物がまばらに混在する |
| 3 焼土 | 焼土が濃密に詰まっている、比較的堅い |
| 4 暗赤褐色土 | 8mm大の炭化物を多く含む |
| 5 暗褐色土 | 2cm大の炭化物、焼土微細粒を若干含む |
| 6 暗褐色土 | 焼土粒、炭化物粒、1cm大のロームブロックを若干含む |



第17図 特殊土壌

3 ピット (第18図)

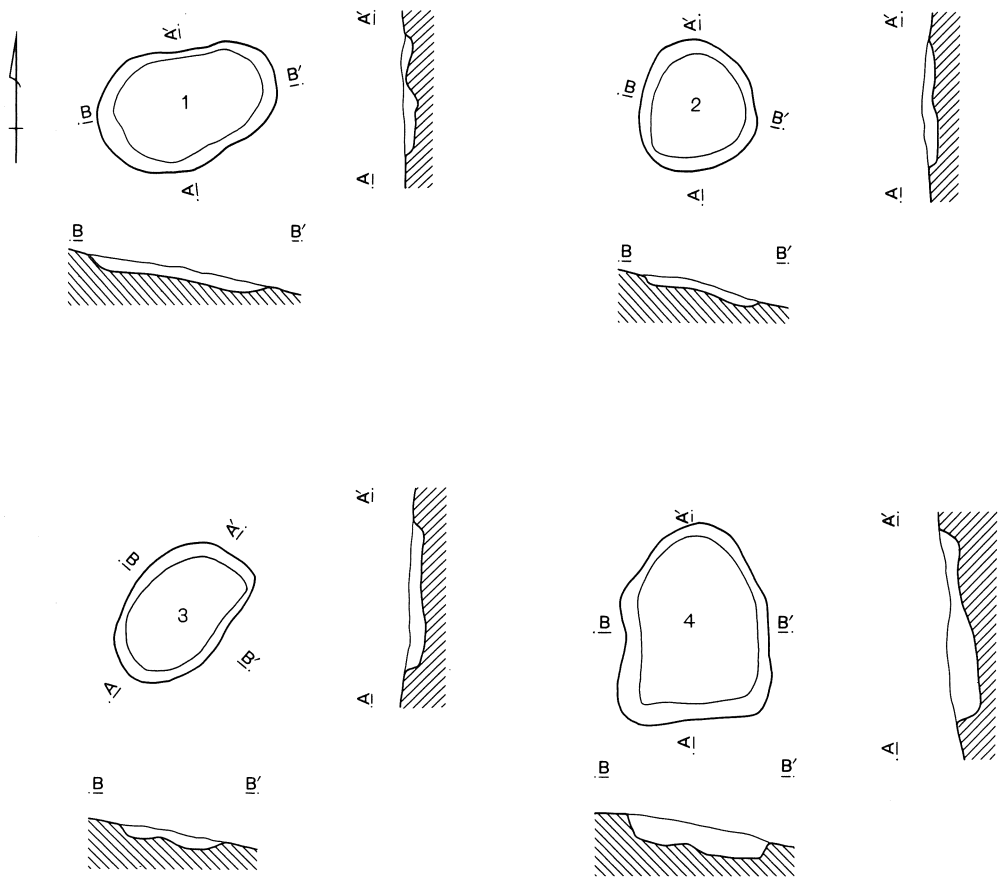
調査区の東北斜面において、4基のピットが検出された。いずれも薄く焼土が堆積していた。掘り込みは浅く、平面形も不整形なものがおおい。出土遺物はいずれもない。

1号ピットは、長楕円形で規模は長さ97cm、幅64cm、深さ6cm。覆土表面に焼土が散っていた。

2号ピットは、隅丸方形に近い円形。直径は約64cm、深さ5cm。焼土は少ない。

3号ピットは、1号ピットと同じく長楕円形。規模は長さ83cm、幅55cm、深さ7cm。底面には、凹凸があるが、柱穴の類ではないようである。焼土は少ない。

4号ピットは、4基の中で最も大きい。平面形は2つのコーナーが直角を呈している。どちらかと言えば、土壇的な形態である。規模は長さ103cm、幅80cm、深さ14cm。



S P 1
暗褐色土 直径 3 cm 大の小石を含む、焼土粒、若干含む

S P 3
暗褐色土 直径 1 cm 大の焼土粒を含む

S P 2
暗褐色土 小礫を含む、焼土粒は遺構の周縁に認められる

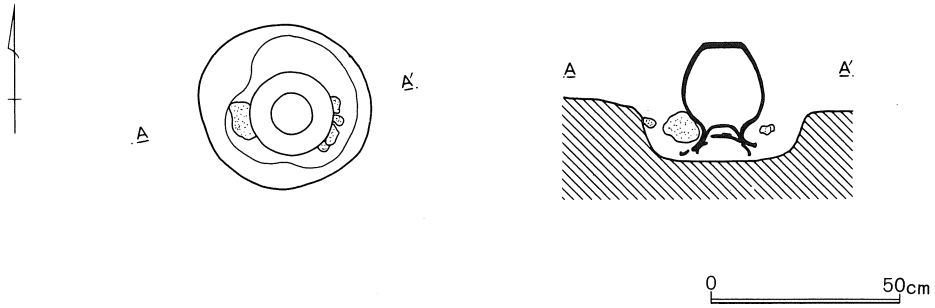
S P 4
暗褐色土 炭化物を若干、焼土粒を一様に含む



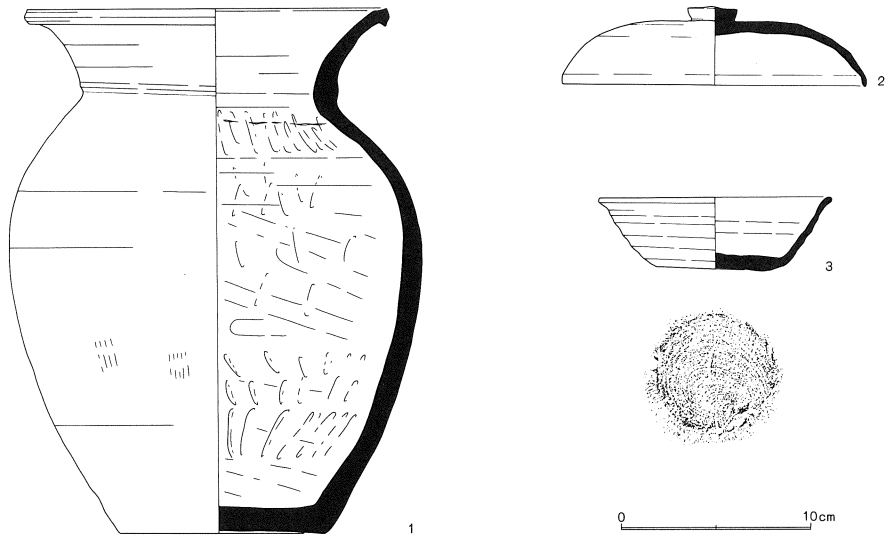
第18図 第1号・2号・3号・4号ピット

4 火葬墓 (第19、20図)

重機による表土掘削の最中に、須恵器の甕の底部が露呈し、遺構の存在が確認された。検出された位置は、一連の土壙群とは約10m離れており、標高も低い。遺構の縁に立つとちょうど目の高さ、遺跡の頂部すなわちSK 1～SK15の土壙が集中する位置がある。逆にいえば、土壙群より一身長分下がった山の斜面に、蔵骨器が埋納されていることになる。遺構の規模は直径約45cm、深さ約15cm。遺構確認面からはきわめて浅いが、地表面からは40cmほどの深さになる。山頂のため、土砂の堆積が薄いので、元の遺構の掘り込みの上端は、現在の地表面とほとんど変わらないと推定される。覆土は単一で土壙と同じく黒褐色土。蔵骨器は須恵器の甕、坏、蓋からなる。出土状況は下から蓋、伏せた坏、伏せた甕の順に検出された。坏は完全に甕の口を密閉していた。



第19図 火葬墓



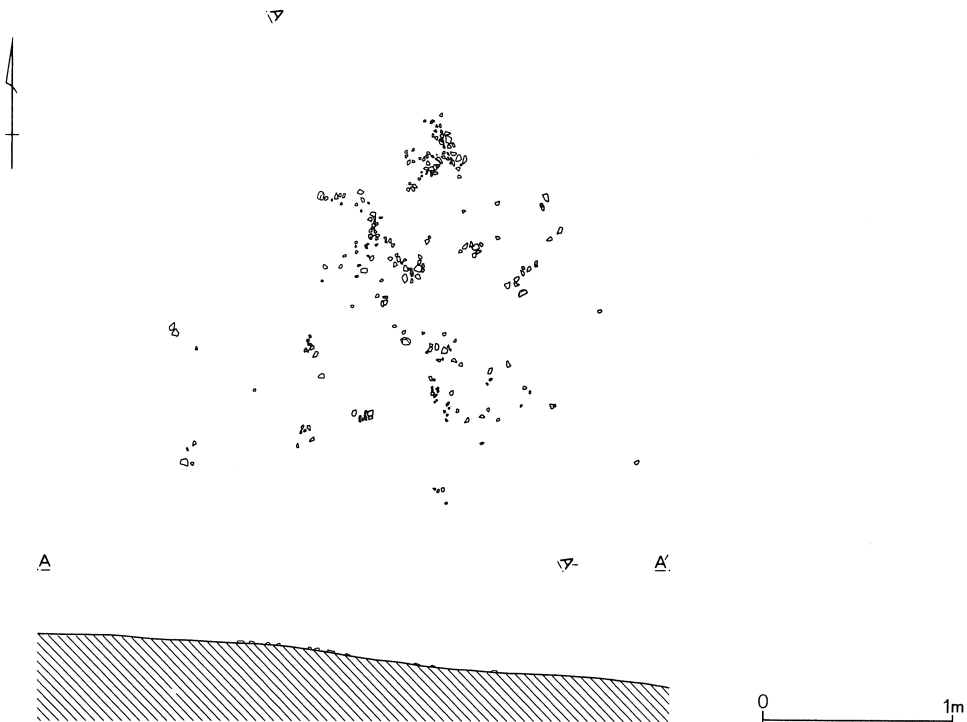
第20図 蔵骨器

火葬墓出土遺物観察表（第20図）

番号	器種	法量(cm)	色調・胎土	残存率	形態・手法の特徴
1	甕	口径 19.2 底径 10.8 器高 27.4	灰色 白色針状物質 白色鈹物を含む	75%	なで肩のプロポーションである。口唇はシャープな作り。成形はロクロ右回転による。胴部外面は平行叩きの後、丁寧なヨコナデにより滑らかに調整される。胴部内面はヘラ状工具を使って器肉を削り、不規則なヨコナデおよびナデで調整。底部外面は回転を利用しない一定方向への削りが施される。南比企産。
2	蓋	径 16.0 器高 4.1	淡褐色 白色針状物質、 白色鈹物、5mm 大の砂礫を含む	100%	シャープさに欠けぼつてりしている。つまみは扁平に近いがかるうじて突起が観察できる。焼成はきわめて悪く、生焼けに近い。器表面は摩滅が激しい。南比企産。
3	坏	口径 12.3 底径 6.1 器高 3.7	灰色 白色針状物質を 多く含む。	99%	ややいびつである。口縁は外反する。成形は粘土紐の左巻き上げによる。焼成はやや甘く、底部内面は赤色化している。底部回転糸切り離しの後未調整。南比企産。

5 土器集中遺構 (第21図)

蔵骨器と同様、土壙群から約10m離れて検出された。山頂部の平場が終わりかける緩やかな斜面地にある。約3m四方に土師器と若干の破片が散在することから、住居等の遺構の存在が予想されたが、周囲を10cmほど掘り下げてみてもなんらかの遺構であるという確証は得られなかった。遺物は1片が2cm大ほどの細片ばかりである。摩耗したものがほとんどで、土器のどの部分か明確にわかるものは一つもない。また、遺物は硬化した地山面にごく薄く、無秩序に散らばっているだけである。遺物と遺物の間にはごくわずかに炭化物粒がみられるが、焼土は皆無である。なお、この遺構は簡易舗装された山道の直下から検出されている。したがって、表土の厚さ、遺物の出土状況などを考えれば、本来の遺構はすでに破壊されており、遺物はその攪乱面に二次的に堆積しているものと判断することもできる。いずれにしても、遺物は、厚さや調整の痕跡から奈良～平安時代の土器片と推定されるので、他の主要な遺構と時代的に大きくくいちがう事はない。



第21図 土器集中遺構

V 自然科学的分析

児沢北遺跡出土試料の自然科学的分析報告

パリノ・サーヴェイ株式会社

1. はじめに

児沢北遺跡は、比企丘陵物見山尾根の先端部に立地する。今回の発掘調査により、調査対象地区である尾根の平坦部～斜面部（肩部）にかけて数基の隅丸長方形の土坑が検出された。これらの土坑覆土中からの出土遺物は乏しく、その性格や構築時期については不明な点が多い。

ところで、これらの土坑覆土中には焼土粒、炭化物、炭化材などが認められるところから、土坑内において火が使用されたことが示唆される。このような特徴から、発掘調査担当者は、土坑の用途として火葬墓と推測しているが、それを積極的に支持する遺体・遺物などは抽出していない。今回の分析調査では、発掘調査担当者との協議を経て、自然科学的手法を用いてこれらの土坑が火葬墓として使用されたかどうかを検討するとともに、その内部で使用された燃料材についても推定を試みた。

まず火葬墓の可能性については、人あるいは動物の生産物や遺骸の痕跡を土坑用覆土に求めるためリン分析を実施する。一方、考古学的試料を対象とした墓の確認にはリン分析の結果のみで判断する場合が多い（竹迫1981、坂上1983他）が、今回は骨の形態が水酸磷灰石（ $3\text{Ca}(\text{PO}_4)_2 \cdot \text{Ca}(\text{OH})_2$ ）である点に注目して、リン分析とともに骨の主成分のひとつとされるカルシウム分析も加え、より多角的に検討を行うこととした。また、燃料材については、土坑内覆土に含まれる植物遺体（炭化材）を対象として材同定を行うとともに、イネ科草本植物については植物珪酸体分析で補った。

2. 試料

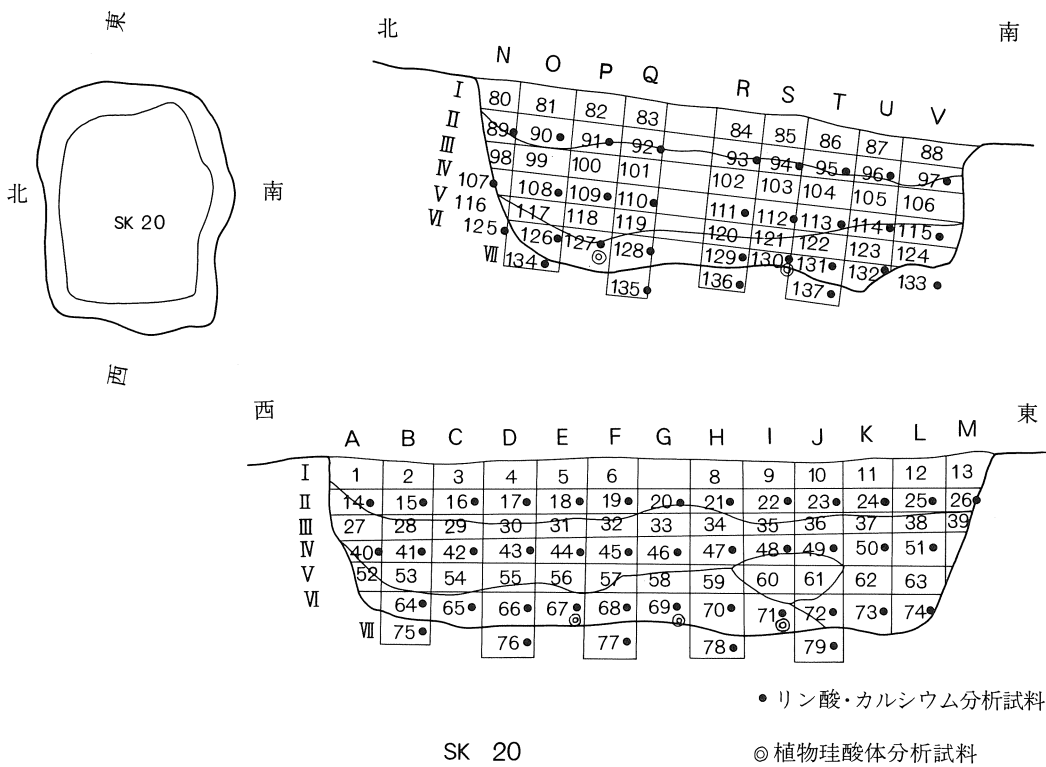
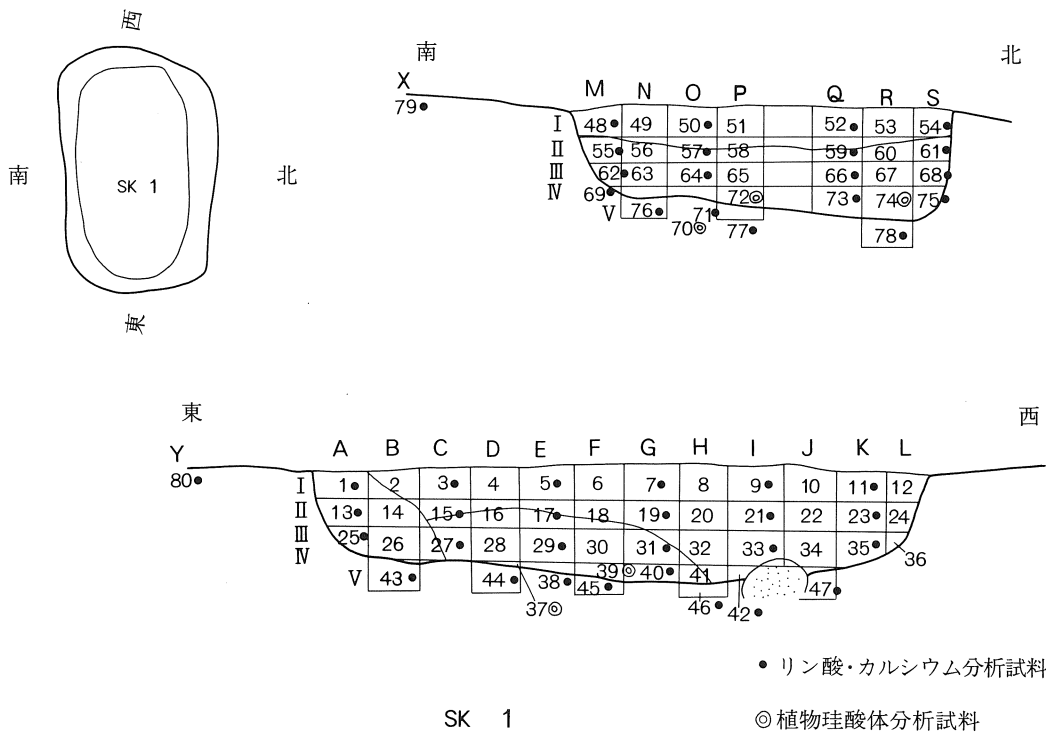
今回、自然科学分析の対象としたSK-1およびSK-20の平面プランは、いずれも隅丸長方形を呈する。土坑の覆土は暗褐色を呈する粘質土で、覆土全体に礫（主に円礫）、焼土粒、炭化物、炭化材の混入が認められる。そのうち焼土粒、炭化物、炭化材は、坑底付近に比較的多く含まれている。特にSK-20では礫の混入が多く認められる。

試料採取は、SK-1およびSK-20の覆土に対して、東-西・南-北に直交する2つのベルトを設定し、縦5cm・横10cmの格子状に区切って行った。なお、各ベルトの縦格子（垂直方向）にアルファベットを、横格子にローマ数字を、便宜上当社にてそれぞれ付した（図22）。

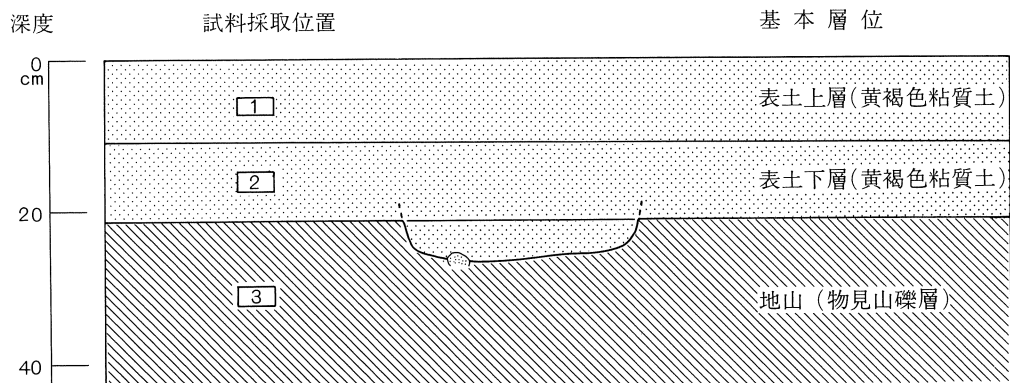
このうち、リン・カルシウム分析および植物珪酸体分析の分析試料は、土坑内の空間的広がり重視して、図22に示したように選択した。なお、リン・カルシウム分析では、この他に土坑内覆土のリン酸・カルシウム含量を対比するために、標準土層（以下、第1地点とする）の表層～土坑確認面直下までの土壌を採取し、対照試料として分析に供した（図23）。

また、各土坑内に散見された炭化材については、当社にて同定可能と判断されたものを選択し、材同定試料とした（表1）。

以上、分析実施点数はリン・カルシウム分析122点、植物珪酸体分析10点、材同定2点である。



第22図 土壌試料採取地点土層断面図



第23図 第1地点基本土層模式図

表1 出土炭化材の同定試料一覧

試料番号	検出遺構・採取位置
1	SK-1 底部
2	SK-20東西ベルト 底部

3. SK-1・SK-20の用途推定

(1) 分析方法

粉碎、篩別した試料について、過塩素酸分解を行った後、リン酸についてはバナドモリブデン酸法、カルシウムについては原子吸光光度法によりそれぞれ測定した。

分析工程は、以下に示す通りである。

- ①試料を風乾・粉碎した後、0.5mmの篩に全通させる（微粉碎試料）。
- ②水分は、加熱減量法により測定する。
- ③微粉碎試料の一定量を秤り、はじめに硝酸（ HNO_3 ）により、次いで過塩素酸（ HClO_4 ）により加熱分解を行い、水で100mlに定容し、ろ過する。
- ④ろ液の一定量を採取し、発色液を加えて、分光光度計によりリン酸（ P_2O_5 ）を測定する。
- ⑤別にろ液の一定量を採取し、干渉抑制剤を加えた後、原子吸光光度計によりカルシウム（ CaO ）を測定する。

(2) 分析結果

分析結果は、表2・3・4および図24に示す。

<第1地点>

リン酸：各試料とも0.5mg以下の著しく低い値である。また、下位になるにしたがい徐々に低くなる傾向が認められるが、大きな変化とは言えない。

カルシウム：0.6～1 mg前後の値を得た。リン酸含量に比較するとやや高く、試料間のばらつきも大きい。しかし、わが国の一般的な土壌中に含まれ熱塩酸に溶ける石灰 (CaO) の形で存在するカルシウム含量は、平均0.63% (6.3mg/g) とみられている (山崎、1966)。今回の数値は、これと比較して決して高くはない。

以上から、標準土層中におけるリン酸およびカルシウム含量は著しく低いと考えられる。

表2 第1地点 リン・カルシウム分析結果

試料番号	試料採取層位	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g
1	表土層	0.31	0.73
2	表土層	0.24	0.61
3	掘り方確認面下	0.20	1.07

注) 単位は、リン酸、カルシウムともに乾土1gあたりのmgで表示

<SK-1>

リン酸：各試料とも0.5mg以下の低い値が得られた。しかし、南北ベルトの試料番号75では0.57mgと唯一0.5mg以上の値を示し、対照試料に比較してやや高い。一方、V軸 (底部直下) あるいはX軸・Y軸 (土坑外試料) ではやや低い。ただし、全体として、特に顕著な差は認められない (表3・図24)。

カルシウム：各試料とも1mg前後～1.5mg以下で、対照試料の値でほとんど変わらない。しかし、東西ベルトの試料番号40は2.39mgと明かに高く、他試料に比較して顕著な差が認められる。ただし、試料採取層位単位にみれば、リン酸含量同様に顕著な差は認められない。

<SK-20>

リン酸：各試料ともSK-1試料および対照試料と同様に0.5mg以下の低い値を得た。しかし、試料採取層位単位にみれば、SK-20と若干異なる傾向が認められる。すなわち、東西ベルトのIV (底部) のD～H軸付近では、他の層位に比べてやや高い傾向が認められる。(表4・図24)

カルシウム：大部分の試料で1mg前後～1.5mg以下であるが、東西・南北ベルトともIV (底部) のC～J軸、R～U軸の試料では1.5mg以上であった。したがって、土坑底部付近にカルシウム含量のやや高い部分が認められる。

表3 SK-1 リン・カルシウム分析結果

試料番号	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g	試料番号	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g
1	0.38	1.10	48	0.37	0.97
3	0.43	1.19	50	0.35	0.89
5	0.43	0.99	52	0.37	1.11
7	0.38	0.97	54	0.35	0.72
9	0.38	1.01			
11	0.36	0.75	55	0.32	1.01
			57	0.35	1.15
13	0.45	1.19	59	0.44	1.38
15	0.38	1.45	61	0.39	0.92
17	0.36	1.27			
19	0.38	1.16	62	0.39	1.20
21	0.38	0.93	64	0.35	1.29
23	0.36	0.74	66	0.41	1.41
			68	0.57	1.17
25	0.29	1.07			
27	0.34	1.40	69	0.32	1.03
29	0.34	1.40	71	0.30	1.13
31	0.34	1.30	73	0.39	1.19
33	0.40	1.05	75	0.37	1.04
35	0.36	0.90			
			76	0.24	1.01
38	0.38	1.31	77	0.32	1.07
40	0.36	2.39	78	0.30	0.96
42	0.34	1.09			
			79	0.24	0.73
43	0.29	0.92	80	0.28	0.86
44	0.34	1.15			
45	0.29	1.07			
46	0.27	0.86			
47	0.24	0.98			

注) 単位は、リン酸、カルシウムともに乾土1gあたりのmgで表示

(3) 考察

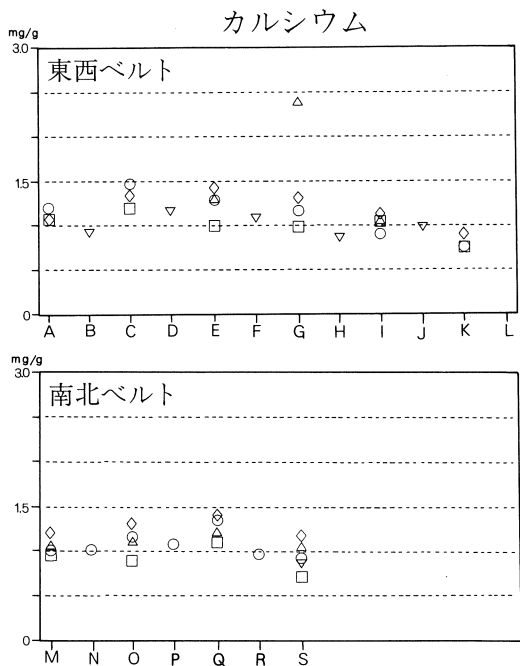
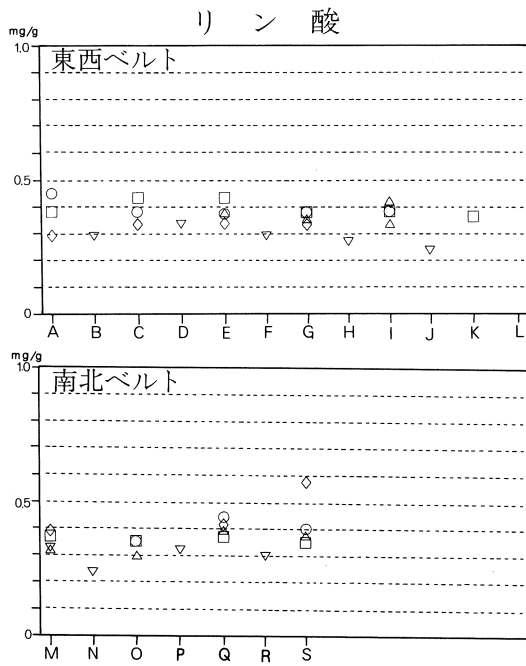
SK-1では、標準土層である第1地点と比較した場合、部分的にリン酸・カルシウム含量の高い試料も認められたが、概してその含量が高くない点、および土坑底部にリン酸・カルシウム含量の集積する傾向が認められない点から、土坑内にリン酸あるいはカルシウム成分の高いものが存在した可能性は低いと考えられる。

一方、SK-20では、東西ベルトの土坑底部付近にリン酸・カルシウムの相対的な富化が認められ、リン酸あるいはカルシウム含量の高いものが堆積していた可能性がある。しかし、人あるいは動物の生産物や遺骸の痕跡とするには、絶対量的な点からみて困難を伴う。むしろ、底部付近に炭化粒あるいは炭化材が多く混入していたとされることから、これら植物成分の影響による可能性の方が高いと考えられる。

表4 SK-20 リン・カルシウム分析結果

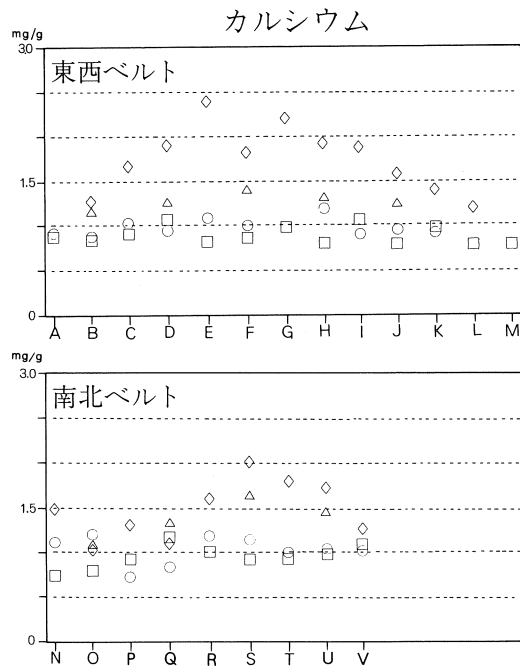
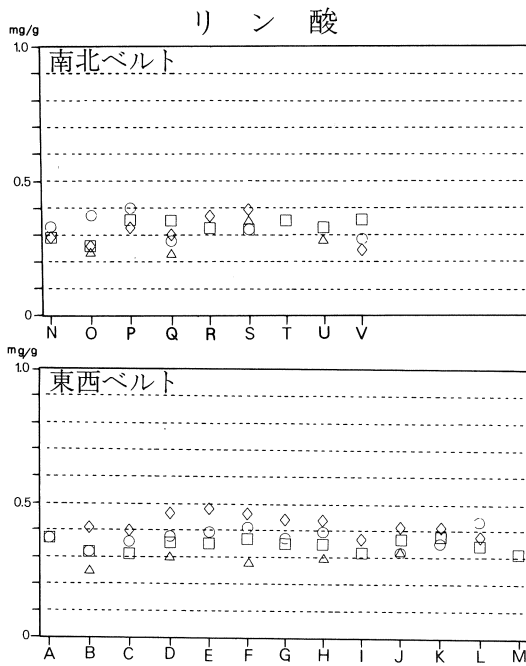
試料番号	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g	試料番号	リン酸含量 P ₂ O ₅ mg/g	カルシウム含量 CaO mg/g
14	0.37	0.89	89	0.30	0.73
15	0.32	0.85	90	0.25	0.77
16	0.31	0.91	91	0.35	0.91
17	0.35	1.04	92	0.35	1.16
18	0.35	0.83	93	0.32	1.00
19	0.37	0.85	94	0.32	0.91
20	0.35	0.97	95	0.35	0.92
21	0.35	0.80	96	0.32	0.98
22	0.32	1.05	97	0.35	1.07
23	0.37	0.79			
24	0.37	0.94	107	0.32	1.10
25	0.35	0.77	108	0.37	1.18
26	0.32	0.78	109	0.39	0.72
			110	0.28	0.83
40	0.37	0.92	111	0.37	1.18
41	0.32	0.88	112	0.32	1.14
42	0.37	1.01	113	0.35	0.95
43	0.37	0.96	114	0.32	1.04
44	0.39	1.08	115	0.28	1.03
45	0.41	1.00			
46	0.37	0.21	125	0.30	1.47
47	0.39	1.19	126	0.25	1.03
48	0.37	0.90	127	0.32	1.30
49	0.32	0.94	128	0.30	1.10
50	0.35	0.92	129	0.37	1.59
51	0.44	1.18	130	0.39	2.01
			131	0.35	1.78
64	0.41	1.24	132	0.32	1.72
65	0.39	1.65	133	0.25	1.26
66	0.46	1.89			
67	0.48	2.40	134	0.23	1.09
68	0.46	1.80	135	0.23	1.33
69	0.44	2.20	136	0.35	1.64
70	0.44	1.91	137	0.28	0.45
71	0.37	1.86			
72	0.41	1.56			
73	0.39	1.39			
74	0.37	1.19			
75	0.25	1.16			
76	0.30	1.26			
77	0.28	1.41			
78	0.30	1.31			
79	0.32	1.25			

注) 単位は、リン酸、カルシウムともに乾土 1 gあたりのmgで表示



SK 1

凡例 □-I ○-II ◇-III △-IV ▽-V



SK 20

凡例 □-II ○-IV ◇-VI △-VII

第24図 リン酸・カルシウム含量の深さ別変化

4. 土坑の燃料材に関する検討

4-1. 植物珪酸体分析からみたイネ科草本類燃料材

(1) 分析方法と結果の表示方法

分析は、近藤・佐瀬(1986)の方法を参考にした。近藤・佐瀬(1986)の方法は、植物体に形成される植物珪酸体全てを同定の対象とし、種類毎の出現率から過去の植生や栽培植物の有無を推定するものである。分析方法は、以下の通りである。

湿重5g前後の試料を過酸化水素水(H_2O_2)で泥化し、塩酸(HCl)を加えて有機物・鉄分を除去する超音波処理(100w、250KHz、3分間)で土壤粒子を完全に分散した後に、沈定法で粘土分を除去し、重液離法(臭化亜鉛、比重2.3)で植物珪酸体を分離・濃集する。これを封入(封入剤:プリウラックス)し、プレパラートを作成する。400倍の光学顕微鏡(簡易偏光装置装備)下で全面を走査する。その間に、出現するイネ科葉部(葉身と葉鞘)の葉部短細胞に由来した植物珪酸体(以下、短細胞珪酸体と呼ぶ)および葉身機動細胞に由来した植物珪酸体(以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ)を、近藤・佐瀬(1986)の分類に基づいて同定・計数する。

検出された植物珪酸体の出現傾向から生育していたイネ科植物について検討するために、植物珪酸体組成図を作成した。各種類(Taxa)の出現率は、短細胞珪酸体と機動細胞珪酸体の各珪酸体毎に、それぞれの総数を基数とする百分率で求めた。なお、計測数が短細胞珪酸体では200個未満、機動細胞珪酸体では100個未満の試料については組成が歪曲される恐れがあるため、植物珪酸体組成を求めず出現した種類を+で示すにとどめた。

(2) 分析結果

計数結果および各地点の植物珪酸体組成を表5および図25に示す。

イネ科葉部起源の植物珪酸体は、各土坑の試料で300個以上検出されたものが多く、計測数も多い。概して、短細胞珪酸体の計測数が多いため、構成比は短細胞珪酸体の割合が高い。植物珪酸体の保存状態は、両珪酸体で表面に多数の小孔(溶食痕)が生じているものが認められ、不良である。各土坑試料における植物珪酸体組成は、ほぼ同様である。すなわち、両珪酸体でタケ亜科、不明が高い割合を占め、キビ族、ウシクサ族(ススキ属)などがこれらに続く。また、栽培植物とされるイネ族イネ属がわずかに検出される試料もある。

なお、今回の分析試料からは、イネ科植物を燃焼した後の灰中に多数認められる組織片が全く認められない。

(3) 考察

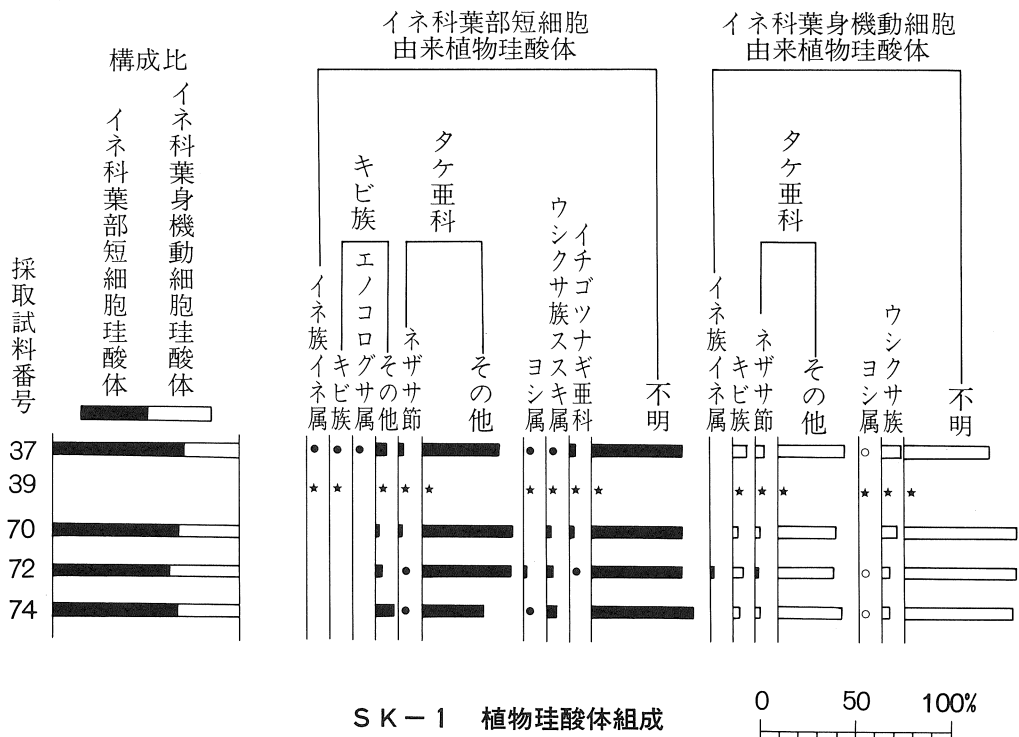
今回の試料からは、イネ科植物の燃焼後の灰に多数認められる組織片が全く認められなかったことから、今回検出されたタケ亜科、キビ族、ウシクサ族(ススキ属)、イネ属などのイネ科植物が燃焼後の灰に由来した可能性は考えにくい。

表5 植物珪酸体分析結果

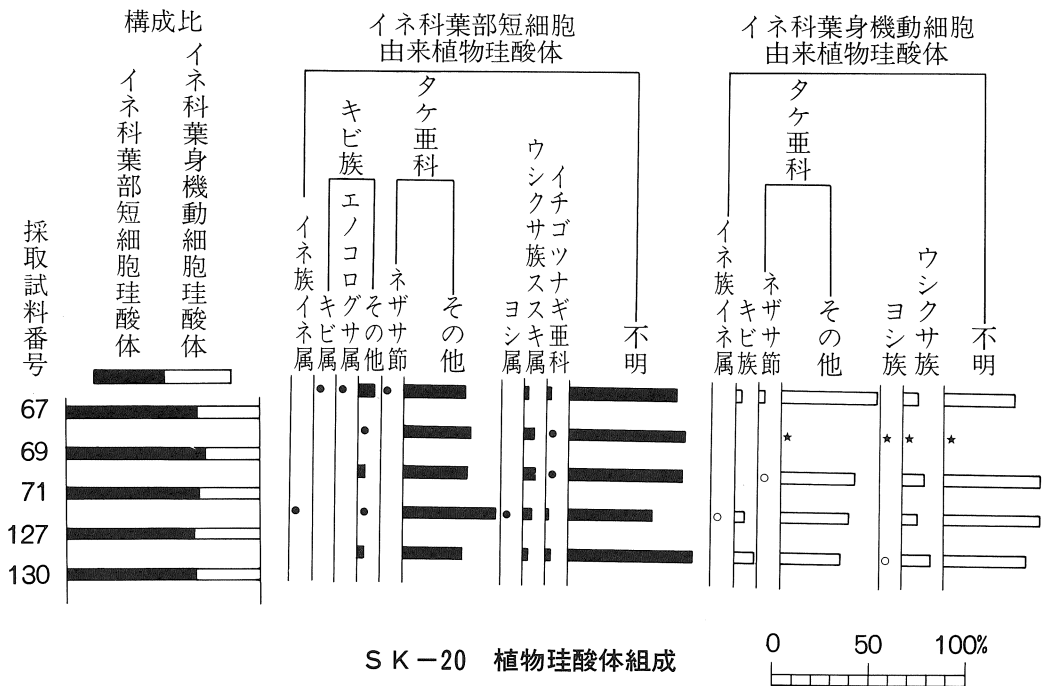
種類 (Taxa)	試料番号	S K-1					S K-20				
		37	39	70	72	74	67	69	71	127	130
イネ科葉部短細胞珪酸体											
イネ族イネ属		2	1	—	—	—	—	—	—	1	—
キビ族キビ属		1	2	—	—	—	1	—	—	—	—
キビ族エノコログサ属		1	—	—	—	—	1	—	—	—	—
キビ族 (その他)		14	7	3	6	20	18	1	6	1	6
タケ亜科ネザサ節		6	2	3	1	2	1	—	—	—	—
タケ亜科 (その他)		101	9	101	103	72	72	75	72	102	67
ヨシ属		1	1	—	3	2	—	—	—	2	—
ウシクサ族ススキ属		1	9	4	8	11	5	10	12	9	4
イチゴツナギ亜科 (その他)		9	7	4	1	—	4	2	2	3	5
不明キビ型		66	43	51	56	50	57	65	63	53	76
不明ヒゲシバ型		31	32	29	17	32	28	25	33	10	36
不明ダンチク型		25	31	23	34	42	38	39	30	26	25
イネ科葉身機動細胞珪酸体											
イネ族イネ属		—	—	—	2	—	—	—	—	1	—
キビ族		8	5	2	7	4	3	—	—	6	11
タケ亜科ネザサ節		4	4	2	2	2	3	—	1	—	—
タケ亜科 (その他)		40	31	32	40	39	54	34	39	39	36
ヨシ属		1	1	—	1	1	—	2	—	—	1
ウシクサ族		11	8	9	6	5	9	8	11	9	17
不明		50	45	63	80	66	40	44	52	55	50
合計											
イネ科葉部短細胞珪酸体		258	144	218	229	231	225	217	218	207	219
イネ科葉身機動細胞珪酸体		114	94	108	138	117	109	88	103	110	115
計測数		372	238	326	367	348	334	305	321	317	334

ところで、焼土試料から燃料材を推定した例として、多摩ニュータウン遺跡の焼土の分析調査(佐瀬、1982)や千葉県印旛村平賀遺跡群から検出された炉址焼土を対象とした分析調査(大越、1985)がある。多摩ニュータウン遺跡の焼土の分析調査によれば、古墳時代にはススキなどのキビ亜科植物が燃料材として選択的に利用されたことが推定された。また、平賀遺跡群の調査によれば、焼土からイネ科植物葉部の組織片が多く検出され、縄文時代早期から奈良時代までは燃えつきやすく火力の強いタケ亜科が、古墳時代から奈良時代にはススキ属やイネ属が多く使用されたと推定されている。これらの事例を考慮すれば、今回検出された種類が当時燃料材として利用されていたであろうことは想像に難くない。

以上から、両土坑の内部から検出された植物珪酸体が、土坑内あるいは外部で燃焼した後の灰に由来したとは考えにくい。これらの種類が当時の燃料材の一部としてイネ科植物が利用された可能性は示唆される。



SK-1 植物珪酸体組成



SK-20 植物珪酸体組成

出現率は、イネ科葉部短細胞珪酸体はイネ科葉部短細胞珪酸体総数、イネ科葉身機動細胞珪酸体はイネ科葉身機動細胞珪酸体総数をそれぞれ基数として百分率で算出した。なお、●○は1%未満の種類(Taxa)をあらわす。★はイネ科葉部短細胞珪酸体の総数が200個未満、イネ科葉身機動細胞珪酸体の総数が100個未満の試料において出現した種類をあらわす。

第25図 植物珪酸体組成

4-2. 材同定

(1) 同定方法

試料を乾燥させたのち木口・柾目・板目の3断面を作製、走査型電子顕微鏡（無蒸着・反射電子検出型）で観察・同定した。同時に電子顕微鏡写真図版（写真図版21）も作製した。

(2) 同定結果

観察の結果、試料番号1はサクラ属の一種に、試料番号2はクリに同定された。試料の主な解剖学的特徴や現生種の一般的な性質は次のようなものである。なお、試料の科名・学名・和名およびその配列は「日本の野生植物 木本Ⅰ・Ⅱ」（1989）に従った。また、一般的性質などについては「木の事典第1巻～第17巻」（1979～1982）も参考にした。

・クリ (*Castanea crenata*) ブナ科

環孔材で孔圏部は1～4列またはそれ以上、孔圏外でやや急激に管径を減じたのち漸減しながら火災状に配列する。大道管は単独、横断面では同形～楕円形、小道管は単独および2～3個が斜（放射）方向に複合、横断面では角張った楕円形～多角形。道管は単穿孔をもち、壁孔は交互状に配列、放射組織との間では柵状～網目状となる。放射組織は同性、単（～2）列、1～15細胞高。柔組織は周囲状および短接線状。年齢界は明瞭。

クリは北海道南西部・本州・四国・九州の山野に自生し、また植栽される落葉高木である。材はやや重硬で、強度は大きく、加工はやや困難であるが耐朽性が高い。土木・建築・器具・家具・薪炭材・櫓木や海苔粗朶などの用途が知られている。

・サクラ属の一種 (*Prunus* sp.) バラ科

環孔性を帯びた散孔材で管壁厚は中庸、横断面では角張った楕円形、単独または2～8個が複合晩材部へ向かって管径を漸減させる。道管は単穿孔を有し、壁孔は交互状に配列、内壁にはらせん肥厚が認められる。放射組織は異性Ⅲ型、1～3細胞幅、1～30細胞高。柔組織は周囲状および散在状。年輪界はやや不明瞭。

サクラ属には、ヤマザクラ (*Prunus jamaśakura*) やウワミズザクラ (*P. grayana*) など15種が自生し、多くの変・品種がある。また、モモ (*P. persica*) やスモモ (*P. salicina*) など古い時代に伝えられ栽培されているものもある。多くは落葉性の高木～低木であるが、バクチノキ (*P. zipp-eliana*)、リンボク (*P. spinulosa*) の常緑樹も含まれる。このうちヤマザクラは、本州（宮城・新潟県以南）・四国・九州の山野に分布する落葉高木で、材は中程度～やや重硬・提鞣で、加工は容易、保存性は高い。各種器具材をはじめ、機械・家具・楽器・建築・薪炭材など様々な用途が知られている。また樹皮は樺皮細工に用いられる。

以上、各土坑から検出された炭化材はクリとサクラ属の一種と同定された。これらの樹種は、現在の分布から当時の本遺跡の周辺にも生育していたことが推定できる。また、現在では薪炭材を含めて多様な用途が知られている。

5. まとめ

(1) 火葬墓としての可能性について

リン・カルシウム分析結果では、両土坑とも人骨などの埋納を示唆する顕著な集積傾向は認められなかったことからこれらの土坑を火葬墓と推定するのは現段階において困難である。ただし、SK-20底部付近の相対的な両成分の富化が動物由来であるならば、その可能性もあろう。今後このような遺構に関しては同様の分析成果を蓄積するとともに、脂肪酸分析などによる新たな検討作業が必要と思われる。また、火葬墓の遺体の移動などを含め、考古学的、民俗学的な分析調査も重要課題と考えられる。

(2) 燃料材の利用について

各土坑から検出された炭化材はクリとサクラ属の一種と同定されたが、現在の分布からみる限り当時の本遺跡周辺にも生育していたことが推定できる。また、現在では薪炭材などの多様な用途が知られている。

一方、各土坑の内部にイネ科植物を燃焼した後の灰が混入していたことは考えにくいだが、イネ科植物が当時の燃料材の一部に利用されたことは、従来のデータから充分想定できる。

<引用・参考文献>

(リン・カルシウム分析)

土壤標準分析・測定法委員会編 (1986) 土壤標準分析・測定法 354p 博友社

京都大学農学部農芸化学教室編 (1957) 農芸化学実験書 (第1巻) 411p 産業図書

坂上寛一 (1983) 小山田No.23遺跡・土坑に関する若干の土壌学的考察 小山田遺跡調査会編「東京都町田市・小山田遺跡群II」p. 221-228

竹迫紘 (1981) 11号住居址内埋甕中の土壌リン酸分析 横浜市道高速2号線文化財埋蔵文化財発掘調査報告、横浜市道高速2号線文化財埋蔵文化財発掘調査団 p. 156-158

山崎博 (1966) 微量元素と多量要素—土壌・作物の診断— p. 171 博友社

(植物珪酸体分析)

近藤鍊三 (1983) 植物珪酸体 (プラント・オパール) 分析の農学および理学への応用 十勝農学談話会誌 第24号 p. 66-83

近藤鍊三・佐瀬隆 (1986) 植物珪酸体分析 その特性と応用 第四紀研究 第25号 p. 31-64

大越昌子 (1985) プラント・オパール分析 平賀遺跡群発掘調査報告書 平賀遺跡調査会 p. 803-815

佐瀬隆 (1982) 古墳時代住居址の炉に関する焼土について—植物起源粒子の植物珪酸体から見て— 多摩ニュータウン遺跡 東京都埋蔵文化財センター調査報告書 (第2集) p. 303-308

(材同定)

平井信二 (1979~1982) : 木の事典第1巻~第17巻 かなえ書房

佐竹義輔・原寛・亘理俊次・富成忠夫編 (1989) : 日本の野生植物木本 I・II 平凡社 321、305pp

VI 結語

本遺跡で出土した須恵器の蔵骨器（第20図）は、先述したとおり南比企窯跡群で生産されたものである。当窯跡群産須恵器の編年に関する最新の研究成果と照らしあわせると、1の甕は長胴化が進み、口径と胴部最大径が近くなっていることなどから、渡辺編年のVI期あたりに置くことができる。3の坏は口径が12cm前後である点、底部調整が糸きり後未調整であること、底部付近でわずかに丸みののこる形態上の特徴などから、やはりVI期とみなすのが妥当であろう。2の蓋は天井部が広く張りだしており、あまり類例をみないプロポーションだが、1や3とほぼ同時期のものとしておきたい。以上のことより、蓋・坏・甕のセットからなる蔵骨器は渡辺編年のVI期に属し、その年代は9世紀の前半代と考えられる。



0 10cm

第26図 東松山市教委調査
出土土器

年代は9世紀の前半代と考えられる。

前述のごとく、今回の当事業団の調査と並行して丘陵の下のおわずかな平場において、東松山市教育委員会による発掘調査が実施された。調査は続行中であるため、詳細は触れることができないが、遺構図と出土遺物の一部の資料について情報の提供を受けることができた（第4・26図）。検出された遺構は住居跡が1軒であるが、遺物の散布状況からは、周囲にさらに数軒の住居があることは確実である。出土遺物は須恵器および土師器であるが、大きな個体は少ない。須恵器の中には、破片ではあるが佐波理模倣碗が含まれていることは注目に値する。ただし、遺物は新旧の混在がはげしく、坏では底部ヘラケズリ調整の比較的厚手のもの（III期）と口径12cm前後の底部調整のない薄手のもの（V～VI期）が伴出している。これらは遺

構の重複が原因かと思われる。いずれにしても、この狭い場所に、蔵骨器が埋められた時期とそれを若干遡る時期に住居が営まれていたことは確かである。

こども動物自然公園内の塚群の調査においても、奈良時代の住居跡が1軒発見されている（第2図）が、児沢北遺跡の住居はさらに谷奥に位置する。従来はこのような場所の遺跡は、遺跡の存在すらあまり注意されることがなかったが、物見山丘陵の東縁においては普遍的にあるものかもしれない。緑山遺跡や立野遺跡の性格を、南比企窯跡群との関連から、古代の須恵器生産に関係した人々の小集落と推定する見解があるが、一般集落ではあまり出土しない佐波理模倣碗の存在等を考えると、本遺跡の住居の住人もまた同様の人々であつた可能性が高くなる。

丘陵の上にある火葬墓と、この丘陵下の住居とはどういう関係にあるのであろうか。出土した遺物からは時期的に近いことが言えるが、直接的な関係を証明することはできない。しかしながら、1～4号ピットの配列をたどってゆくと、急傾斜ではあるが、住居へ通ずるルートを見いだせないわけでもない。事実、調査担当者もこのルートを通して、発掘調査に赴いていた。したがって、ここでは、両者においてかなり密接な関係があったとしておきたい。すなわち、奈良時代の後半期に、丘陵下のわずかに日溜りとなっている狭い平場へ、ごく少数の人々がなんらかの目的で住み始め、平安時代にいたって、丘陵の上には火葬墓を造つたと理解したいのである。

では、本書で報告する丘陵の上の火葬墓以外の遺構群をどう捉えたらよいのであろうか。比企地方およびその周辺で蔵骨器を出土した遺跡や、他の地域での例などにも触れて考えてみたい。

遺跡を理解するうえで、第一に、その年代に関しての問題が生じる。土壌は重複を含めて21基あるが、13号土壌覆土中から奈良～平安時代と推定される須恵器の小破片が1点出土しただけであり、そのことをもって土壌の属する時代を判定することは無理があろう。しかし、出土遺物はもとより、表採遺物ですら中世・近世に下る資料是一片もみられないこともまた事実である。なお、土器集中遺構から出土した土師器の細片も奈良～平安時代の遺物と考えられるが、いま1つ断定できる資料に恵まれていない。したがって、遺構の時代推定に関しては遺物からの検証が得られない以上、その性格を究明する過程で類推してゆく他に方法がないのである。

土壌は先述の様に、例外なく壁が焼けている。何かをその中で焼いた、あるいは燃やしたことは間違いないだろう。考えられるものとしては1・土師器焼成遺構、2・烽火場、3・火葬墓の三つがあげられよう。以下各々について検討してみたい。

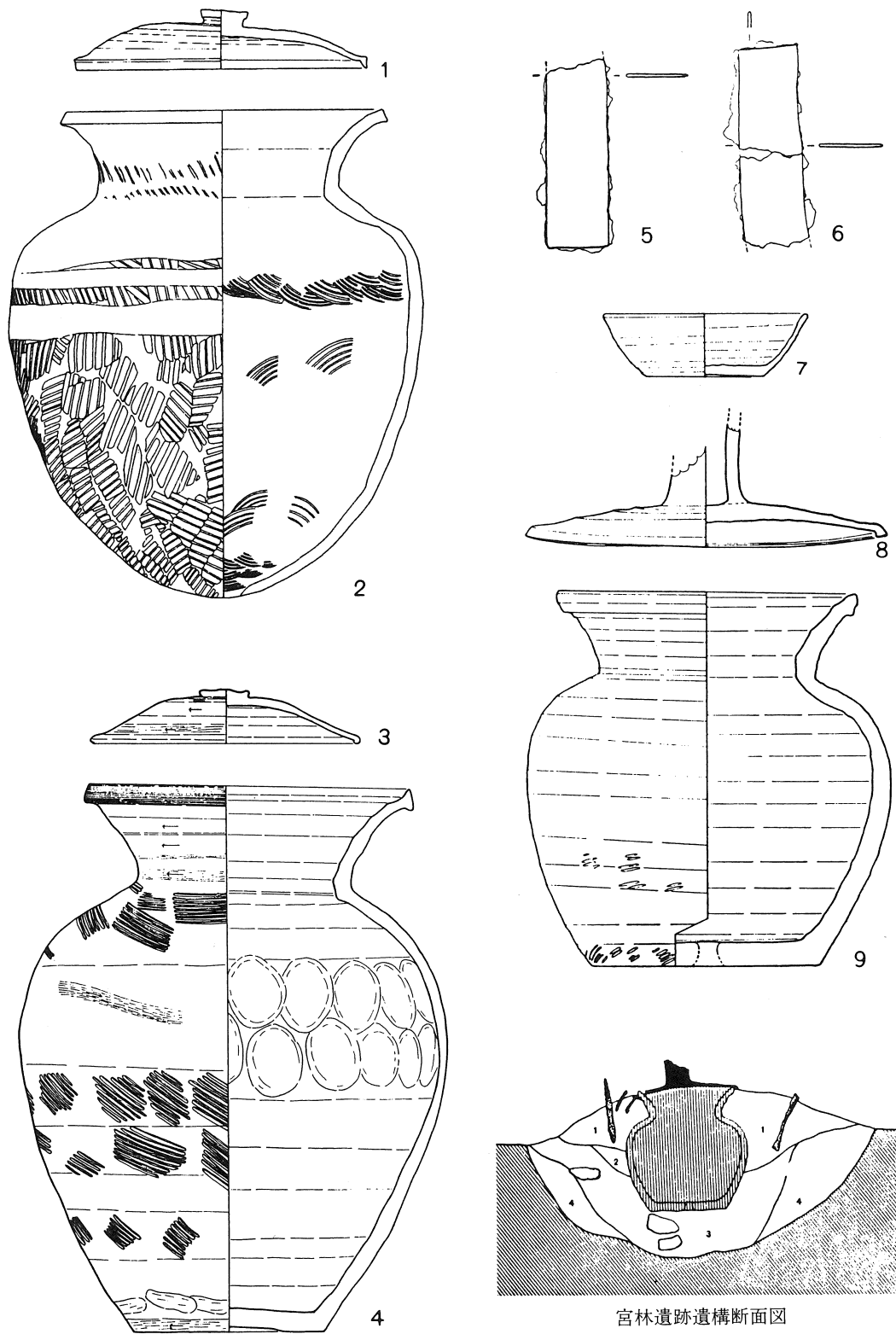
第一に土師器焼成遺構についてはどうだろうか。一般的には粘土の採集が容易な場所に設けられるものであるが、遺跡の立地からは望むべくもない。工房跡のような遺構も未検出である。丘陵の上にわざわざ作られる必然性がまったくないのである。したがって、土壌が土師器焼成遺構である可能性はないと言って良いだろう。

次に烽火場はどうだろうか。南北朝時代の歴史的環境を考えれば、立地的には可能性が高い。近在の遺跡では越畑城跡に烽火場と推定される土壌が1基報告されている。これは直径約3mの掘り込みである。遺構が焼けていたこと、炭化物が多く検出されていることで共通するが、規模的にも形態的にも大きく異なっている。しかも本遺跡の場合は重複を避ける様に連綿と掘り続けられていることが異様である。複数の烽火で信号を送るのであれば、その可能性があるかもしれないが、いずれにしても、烽火場とするには、土壌の規模の小さいことが弱い点である。

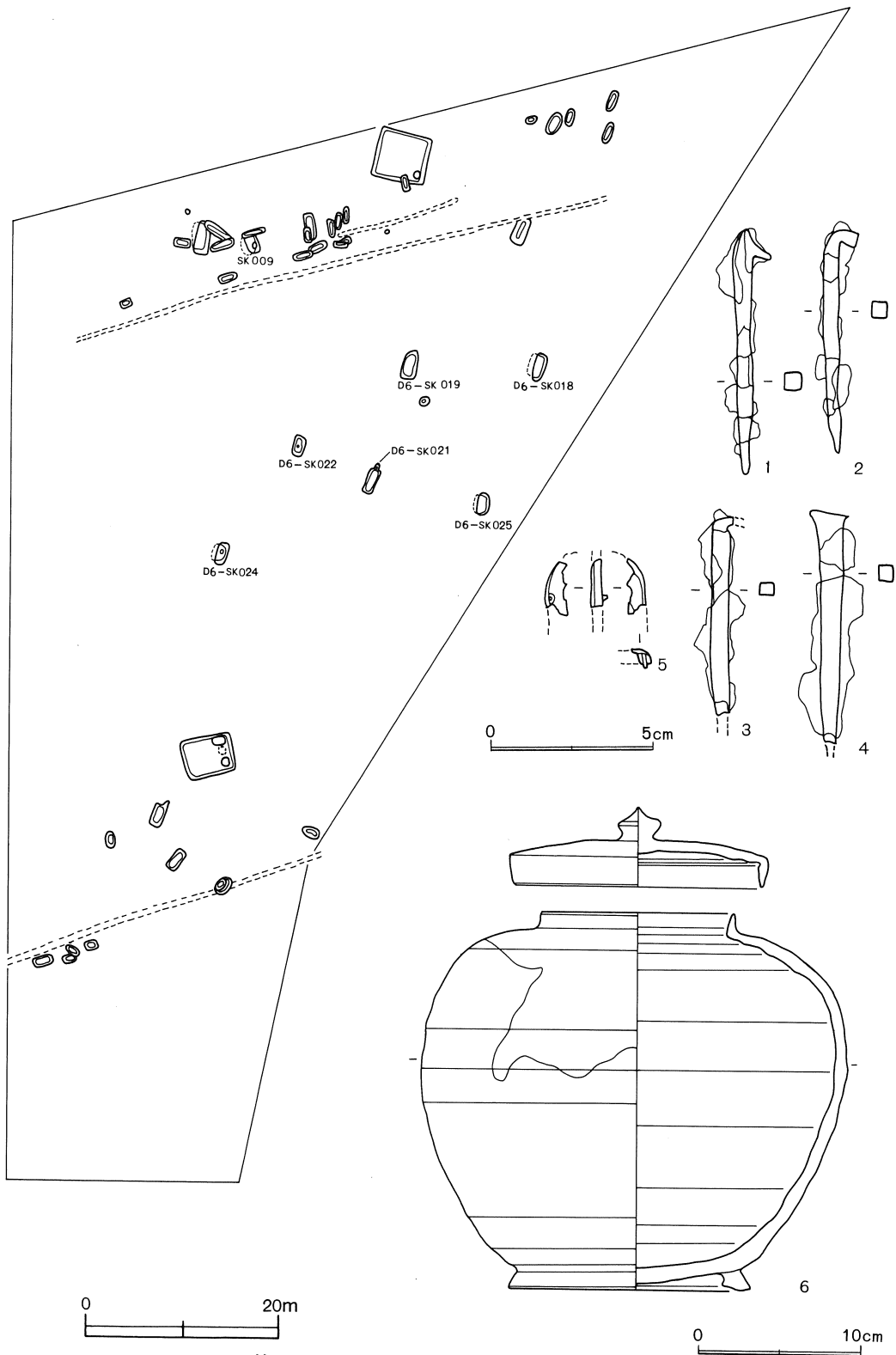
では火葬墓としての可能性はあるだろうか。科学分析結果からは遺体の残存を示す傾向はつかめなかつた。ただし、20号土壌では底部付近の資料において、リン・カルシウムの含有率が高く出ており、まったく遺体の残存がなかったとも言えない。遺体を埋葬した遺構と考えるには無理があるが、茶毘あるいは焼骨を行った施設とみるならば、骨を他所に移したために残存率が低いのであると理解することができる。だが、土壌の規模は人間を伸展するにはあまりにも小規模である。おそらく死亡直後の遺体処理施設ではない。規模や形態で推定するかぎり、焼骨のための施設と考えるのが最も妥当である。このことは、当時の葬送のプロセスを明確にする必要があり、即断はできないが、少なくとも土師器焼成遺構や烽火場ではなく、焼骨遺構と把握の方が自然な理解ではないだろうか、一定の間隔と方向性を保ち、重複を極力避けて営まれている点も示唆的である。

以上の様に土壌は火葬に関係した遺構であろうという結論に達した。焼骨は一連の葬送儀礼の一過程にすぎないが、ここでは広い意味でこれらの遺構を火葬墓と称したい。

では、火葬墓とした場合、いつの時期のものであろうか。何度も触れてきたが、歴史的環境から言えば、古代と中世のいずれも可能性がある。古代の例としてはすくなくとも比企周辺では類例を聞かない。対して中世のものでは、その時代の遺跡を掘ると、きわめて多くの火葬墓を目にするこ



第27図 比企周辺の古代蔵骨器(遺物縮尺1/4)



第28図 ニノ谷遺跡の火葬墓と土壙墓

1～4 鉄釘 5 青銅製品 6 蔵骨器

とがある。規模的にも1m前後であり、当遺跡と似た点がないこともない。しかし、その形状は様々であるが、細長いT字状を呈するものや長楕円形の例が多く、若干本遺跡の例とは異なる。また複数が集中する場合は、いずれかにおいてかわらけや古銭等の遺物が伴うものである。そういった事例に照らしあわせても、中世の火葬墓とするには疑問が残る。蔵骨器を埋納した5号ピットとの連想で推定するならば、一連の土壌群もやはり、古代の遺構と考えるのが妥当であろう。

次に、21基もの土壌で火葬された遺骨はいったいどこに葬られたのか、という疑問が新たに生じてくる。調査区域は丘陵の先端部だけに限られているので、さらに山側に蔵骨器を埋納した遺構があると考えるべきだろうか、あるいは1基だけに限られるのか。この疑問を解くためには、蔵骨器が出土した比企周辺の遺跡の例に触れる必要があるだろう。

管見に及んだ遺跡の出土状況の明らかな例は、大平遺跡、物見山遺跡（第27図1、2）、越畑城跡（第27図3、4）、宮林遺跡（第27図5～9）、代正寺遺跡等である。大平、物見山、越畑城跡の3遺跡は本遺跡と同様、平野部から隔離された丘陵上にあり、対して宮林、代正寺は河岸段丘上および台地上にあって集落に接している。このように立地や遺構のあり方においては若干の差異があるが、いずれも共通している点は、須恵器の蔵骨器は複数出土しないことである。ゆえに、当遺跡の場合も、5号ピットのような遺構は限定されていると考えたい。

そうであるとする、他の遺骨を埋納した遺構を特定しなければならない。ここでは思いあたるのは1～4号ピットである。これらは壁が焼けていないにもかかわらず、覆土には僅かながら焼土が含まれていた。判別の困難な地山でも遺構確認が比較的容易であつた理由もそこにあつた。自然科学分析を行わなかつたので、リン・カルシウム等の残存については不明だが、もし遺骨があつたとしても、斜面に掘られているために流出は激しかつたであろう。遺物がまったく検出されていない状況は、5号ピットと異なり納骨容器が有機質のものであつたか、もしくは直に埋葬されたことを予想させる。なお、ピットは4基だけでなく、精査はできなかったが北斜面にも数基あつたことが確認されており、本来は1～20号土壌に対応する数のピットがあつたのではないだろうか。

ピットがわざわざ斜面に掘られなければならない理由は、焼骨のための施設すなわち土壌を平場に作る必要があつたからではないだろうか。土壌の配列はあきらかに計画性をもって造られており、土器集中遺構が葬送儀礼に関する遺構であるとしたら、納骨よりも焼骨のほうに重きが置かれていたのかもしれない。ただし、これはあくまでも想像の世界に過ぎないが。

以上述べてきたように、現段階では特殊土壌に関してはいまだ不明なままであるが、それ以外の遺構については、火葬という葬送形態と関係づけて理解するに至つた。しかもそれは、火葬墓が複数あるという点で、あまり類例のない遺跡ということになる。そこで最後に、本遺跡の性格を探る上で参考となる遺跡として、栃木県南河内町二ノ谷遺跡（第28図）について触れてみたい。

引用した遺構図には8世紀代の住居跡が2軒あるが、墓壇の年代は火葬墓（D6-SK021）から出土した蔵骨器が9世紀中葉の遺物とみなされており、共存はしていない。調査担当者は、この火葬墓を中心にして、土壌墓6基が一定の間隔と方向性を保って墓域が形成されていることに注目し、これらを家族墓と認識して、火葬墓の被葬者を家長に相当する人物と推定した。土壌は焼けておらず、機能的にも焼骨の施設ではなく直接遺体を埋葬するものと思われるが、遺構の配列や埋葬方法

に格差がある点において、二ノ谷遺跡と本遺跡は共通していると言えよう。児沢北遺跡も、血縁関係を軸として、累々と墓を造っていったのではないだろうか。従来、当該期の発掘調査においては集落しか検出されず、墓域までわかる例はまれであった。そのため古代における葬送のイメージは極めて貧困で、絵巻物等の連想から、野辺にうち捨てられたといったようなことが固定概念化している。本調査例はその意味で、これまで不明であった奈良～平安時代の歴史像の一端を明らかにする新たな資料として意義深いのである。

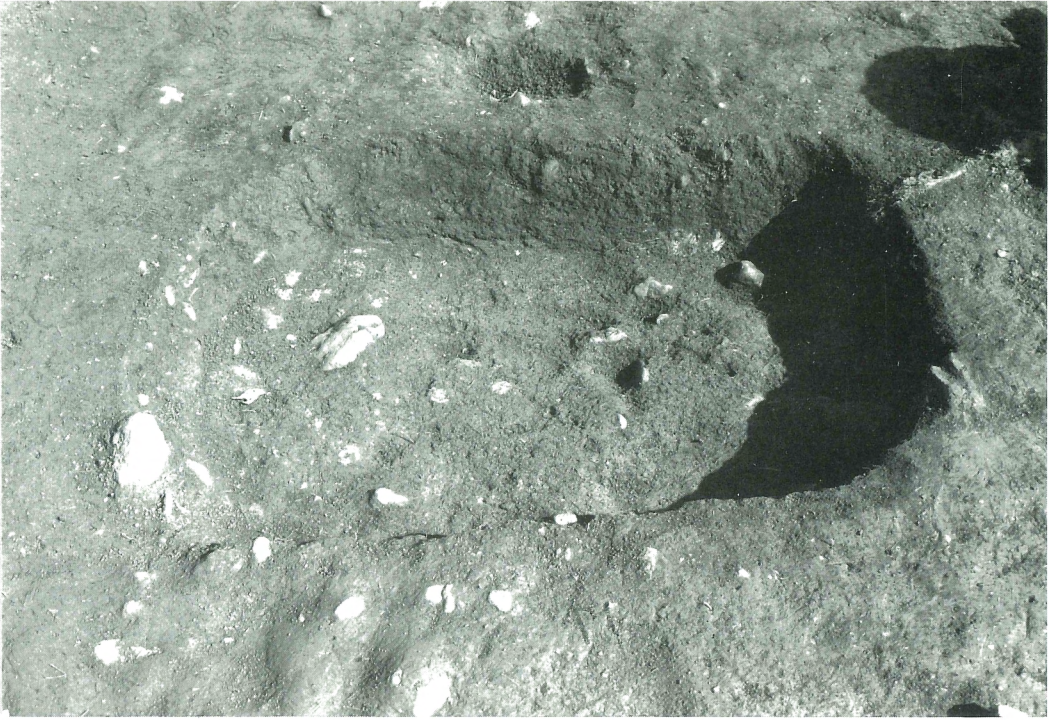
この報告書をまとめるにあたって以下の方々よりご教示いただき、資料調査の便宜を計っていただいた。記して感謝申し上げる次第である。

江原昌俊 大塚孝司 金井塚厚志 竹野谷俊夫 宮島秀夫 渡辺 一

参考文献

- 埼玉県教育委員会 越畑城跡 関越自動車道関係埋蔵文化財調査報告書 8 1979
埼玉県教育委員会 物見山塚群 こども動物自然公園内埋蔵文化財調査報告 1980
埼玉県教育委員会 児沢・立野・大塚原 日本住宅公団高坂丘陵地区埋蔵文化財調査報告 1980
埼玉県埋蔵文化財調査事業団 大林Ⅰ・Ⅱ 宮林 下南原 国道140号バイパス関係埋蔵文化財調査報告 1985
酒井清治 北武蔵における7.8世紀の須恵器の系譜—立野遺跡の再検討を通して 研究紀要 8 埼玉県歴史資料館 1986
川口市教育委員会 叭原遺跡 県立清涼高等学校建設に伴う埋蔵文化財調査報告書 1987
栃木県文化振興事業団 二ノ谷遺跡 自治医科大学周辺地区昭和62年度埋蔵文化財調査 1988
埼玉県立歴史資料館 物見山から出土した蔵骨器 也加多 13 1988
鳩山窯跡群遺跡調査会 鳩山窯跡群2 窯跡編2 1990
仲山秀樹 古代東国における墳墓の様相 白山史学26 1990

写 真 图 版



第 1 号土壤



第 2 号土壤



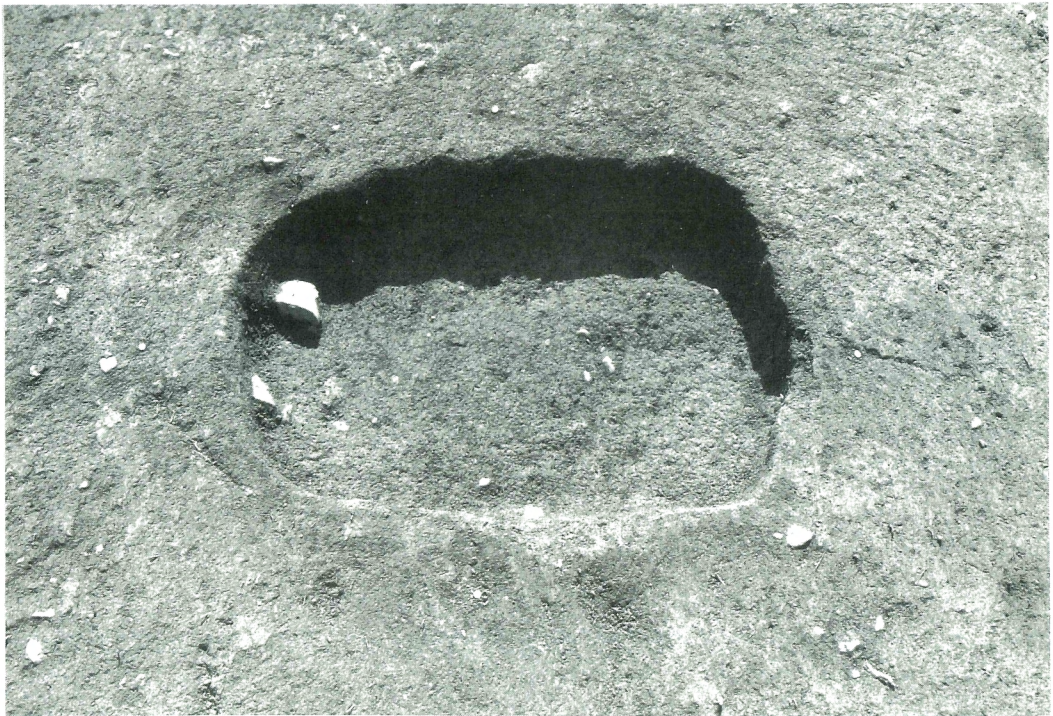
第 3 号土壤



第 4 · 5 号土壤



第 6 号土坑



第 7 号土坑



第 8 号土壤



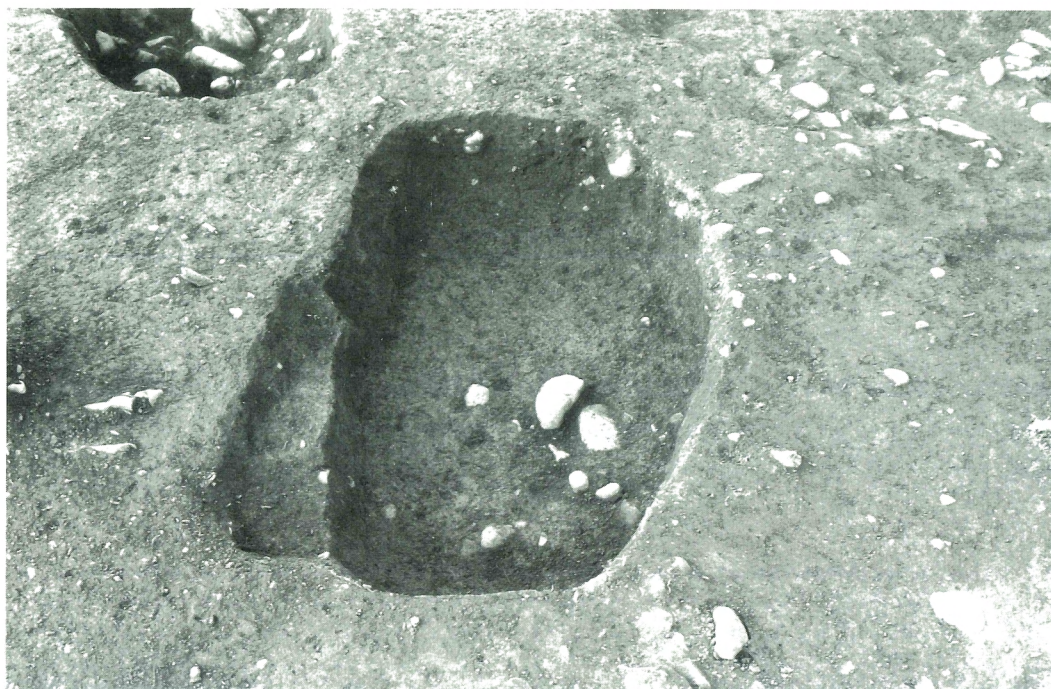
第 9 号土壤



第10号土坑



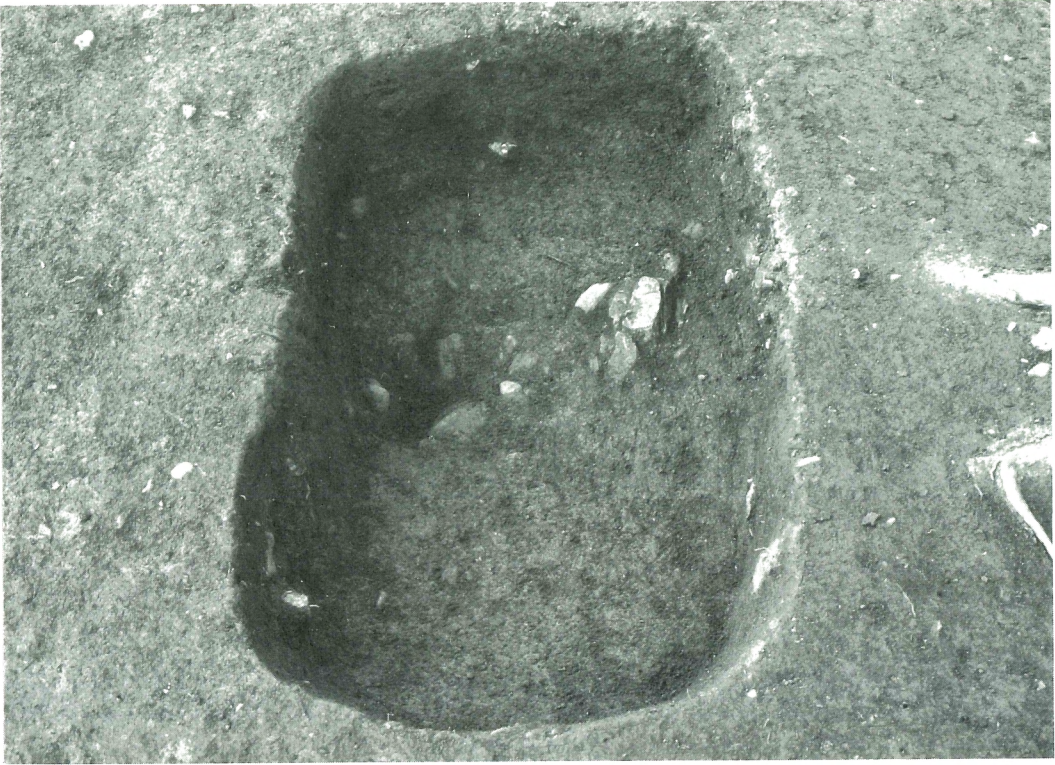
第11号土坑



第12号土壤



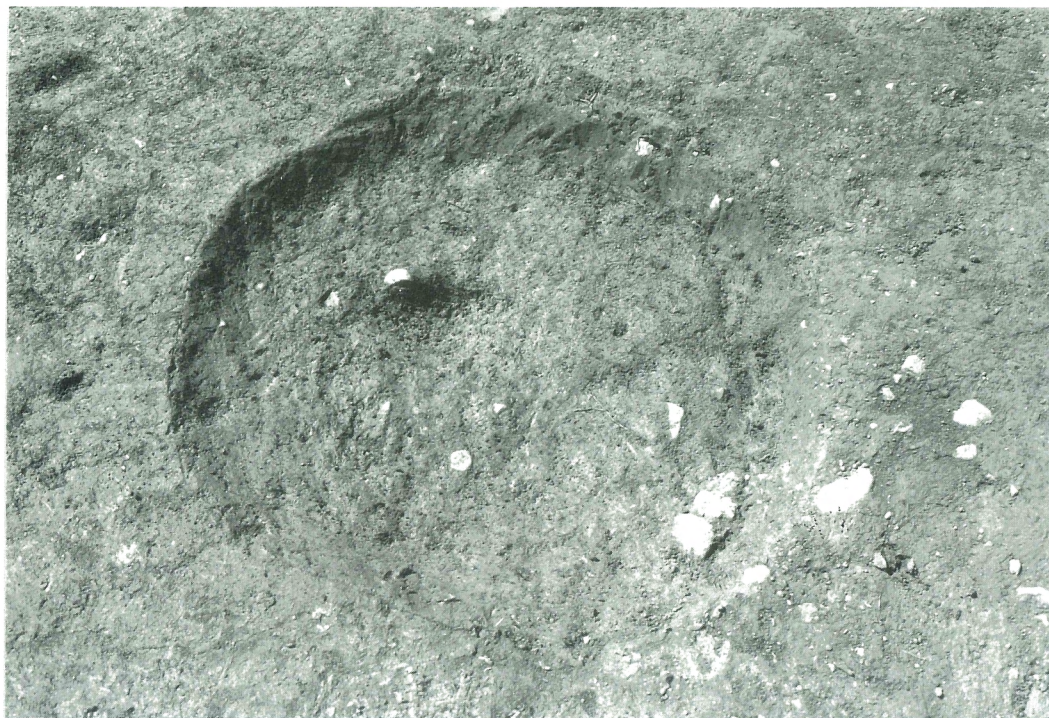
第13号土壤



第14号土壤



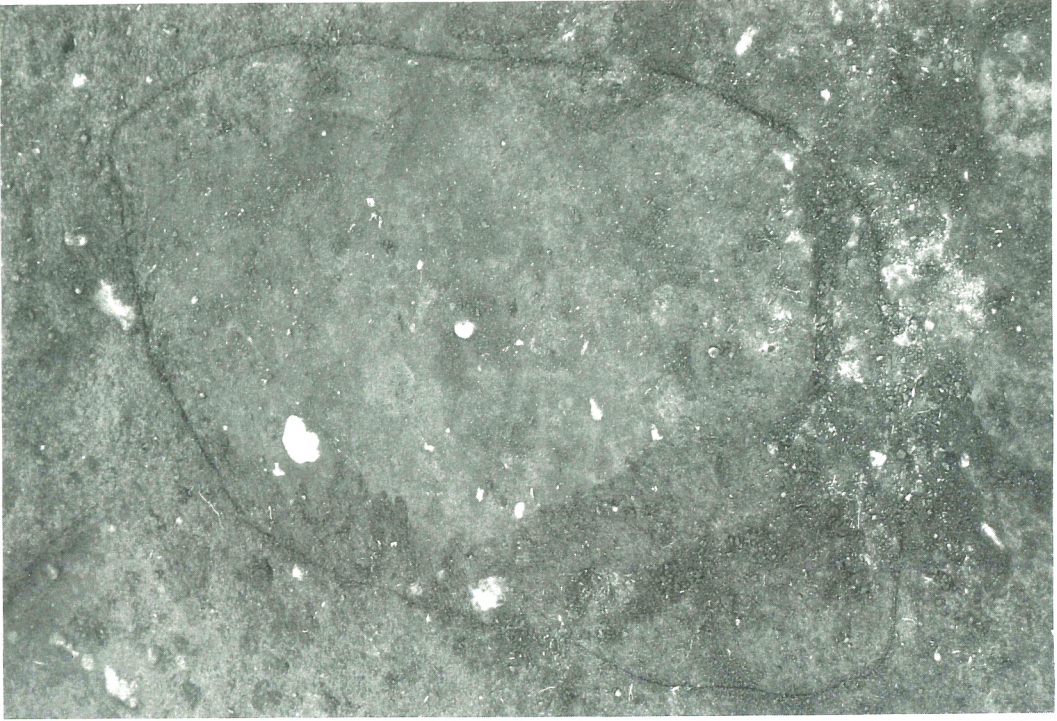
第15号土壤



第16号土坑



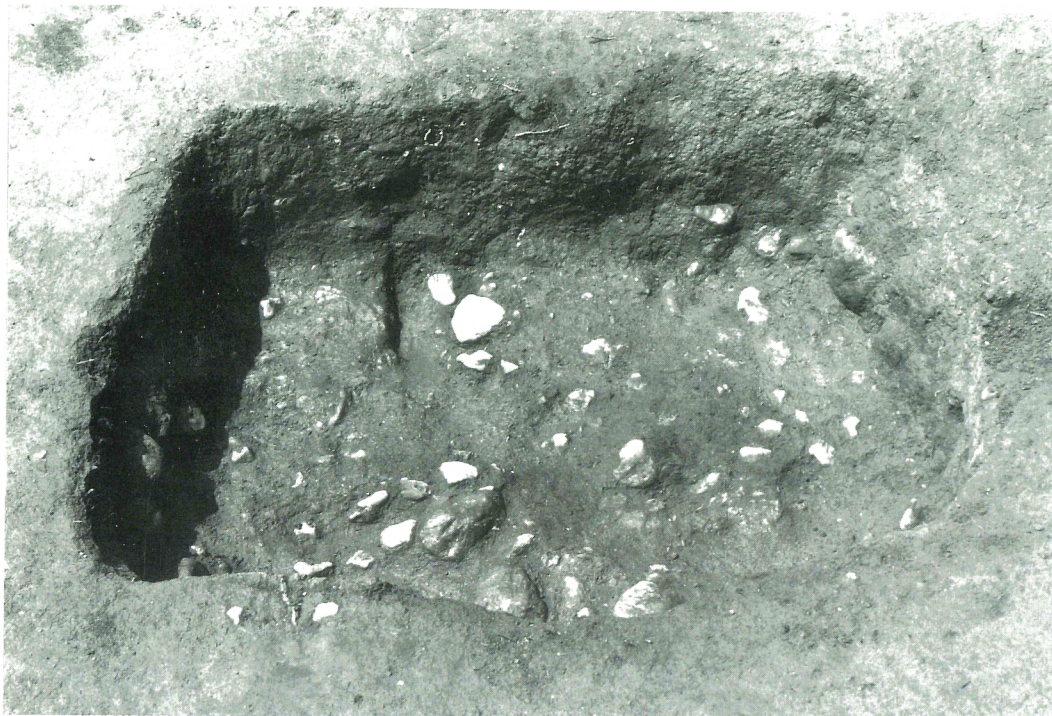
第17号土坑



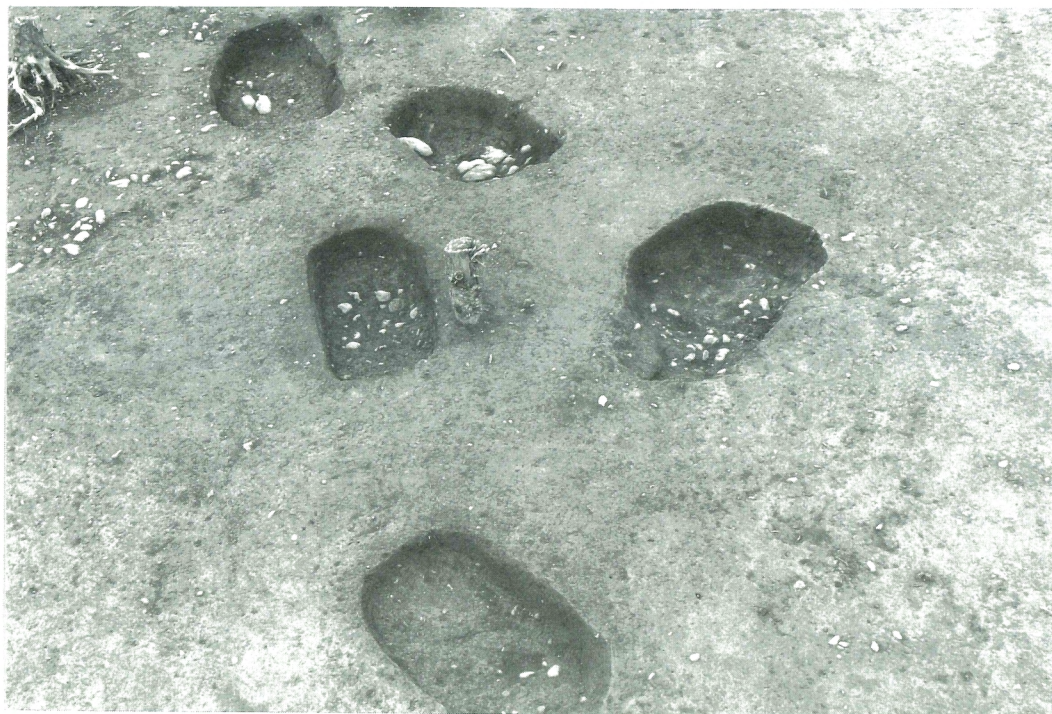
第18号土壤



第19号土壤



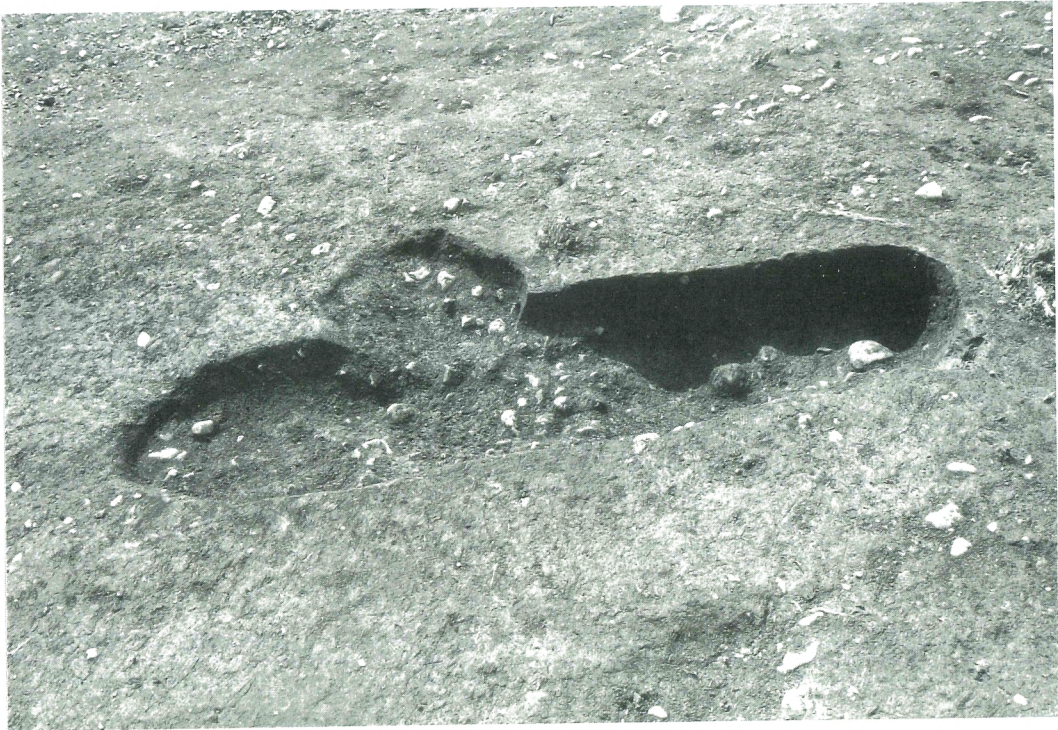
第20号土壤



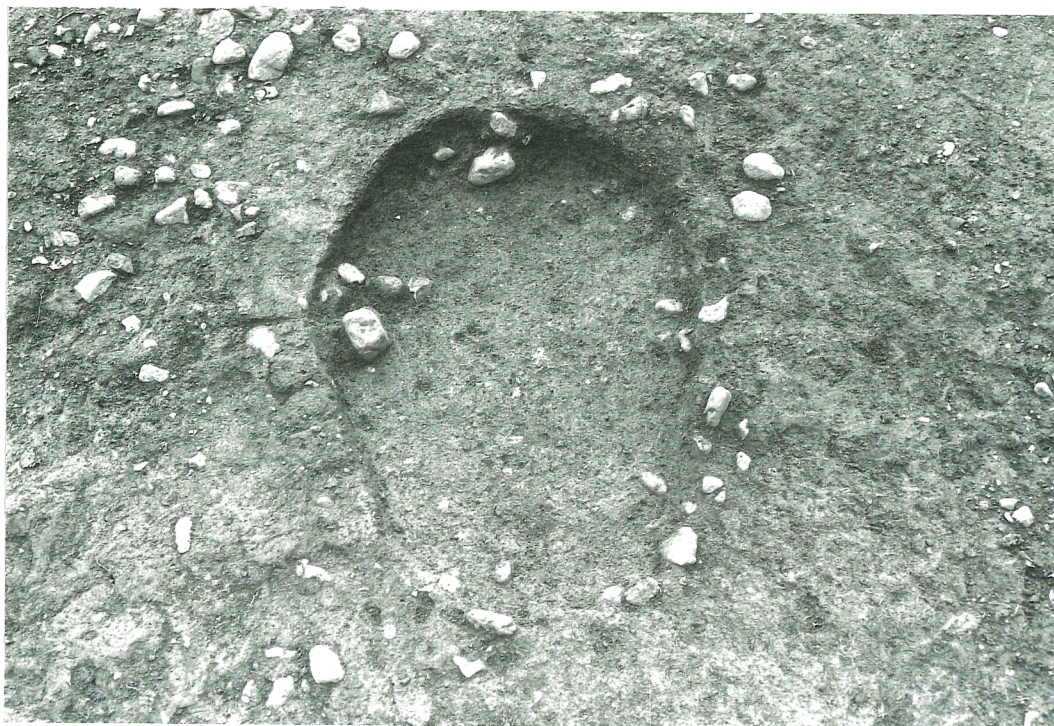
第8~12号土壤



特殊土壤



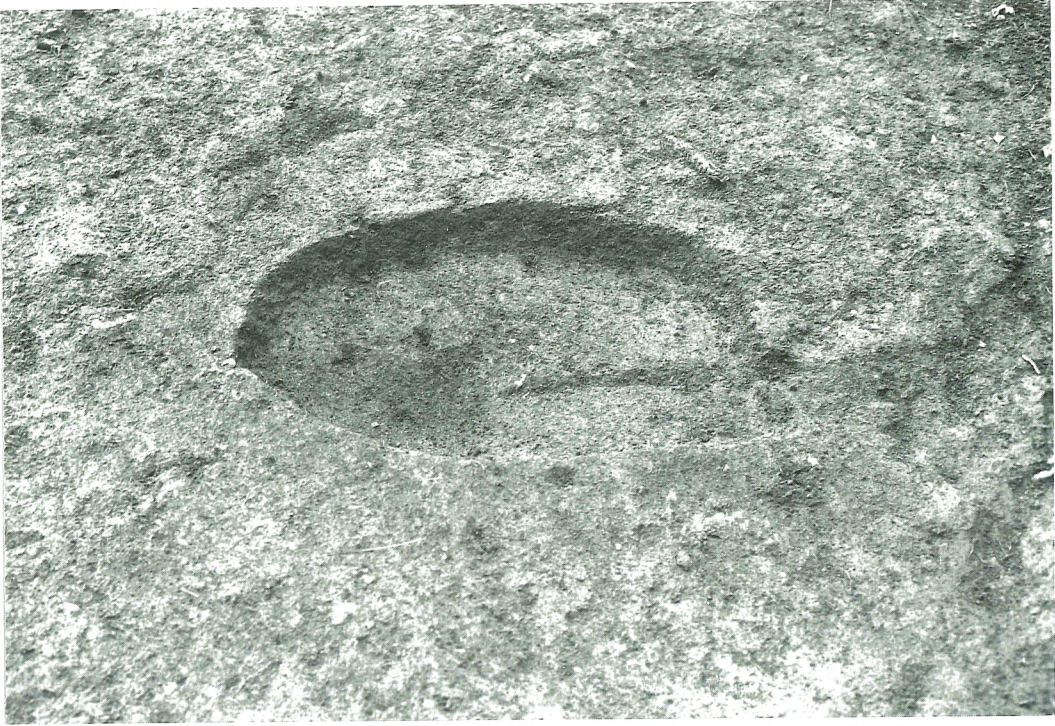
特殊土壤



1号ピット



2号ピット



3号ピット



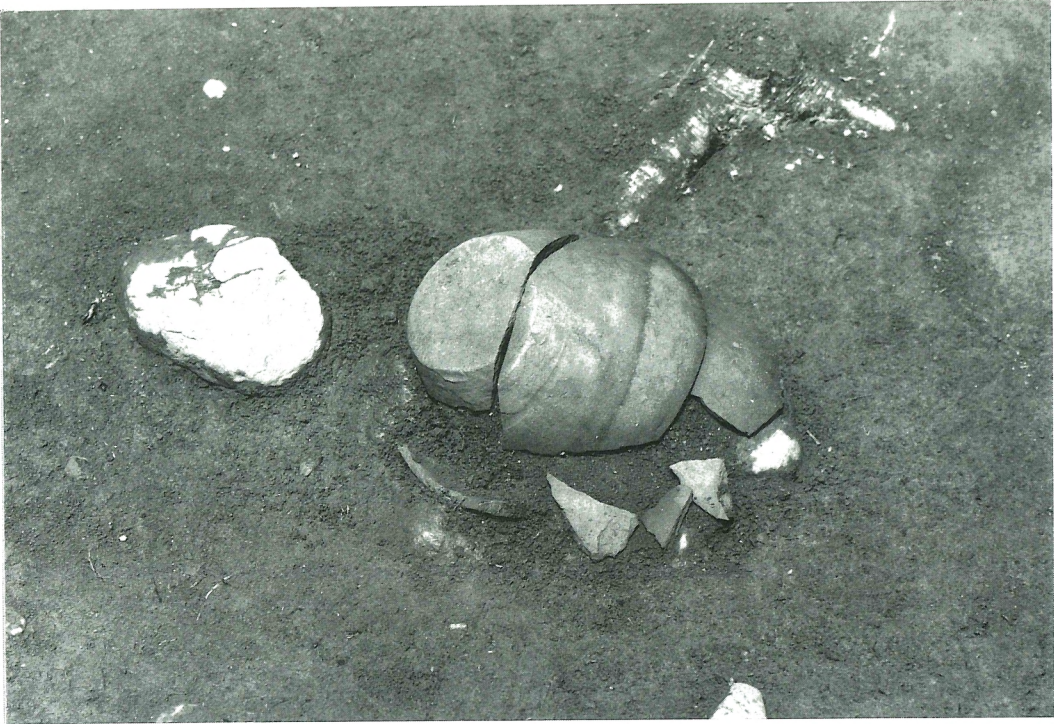
4号ピット



土器集中遺構



土器集中遺構



藏骨器出土状况



藏骨器出土状况



藏骨器出土状况



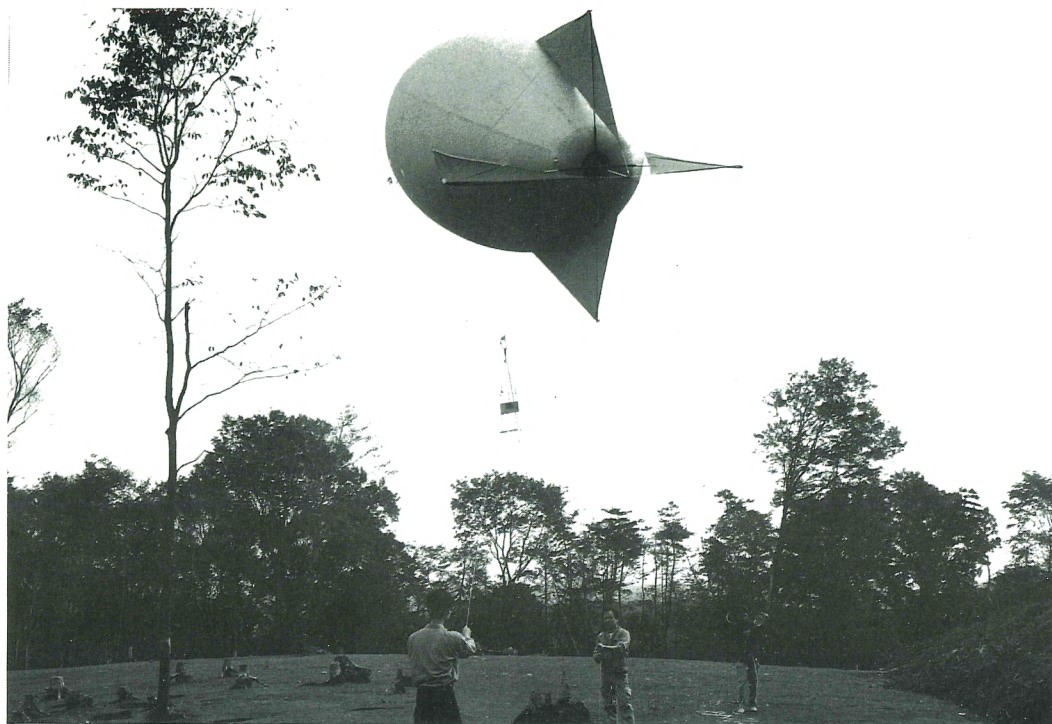
藏骨器出土状况



第20号土壌土壌サンプリング



遺構実測



航空写真測量



遺跡遠景



盖



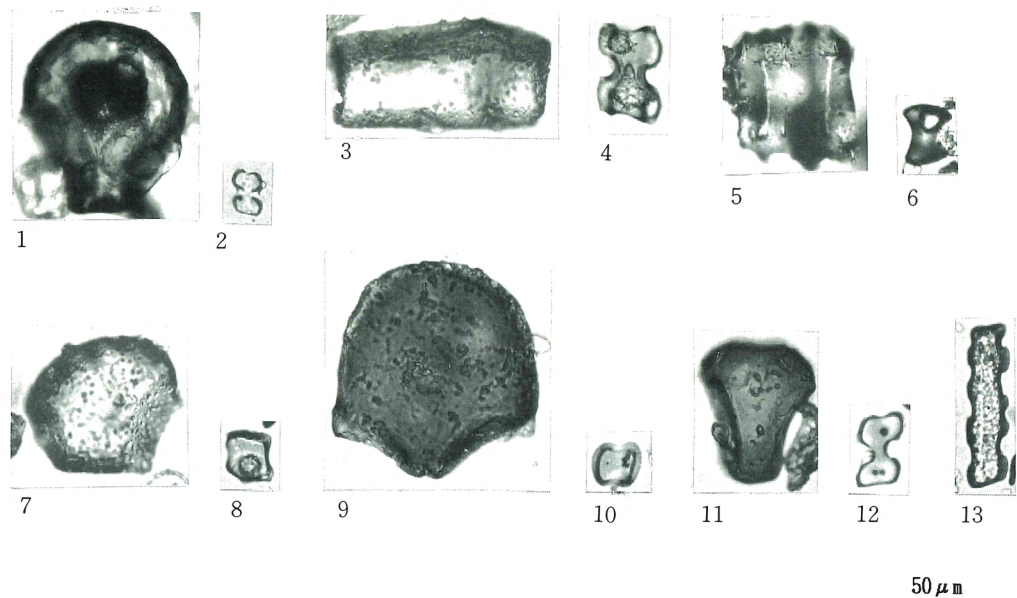
坏



出土遺物

甕

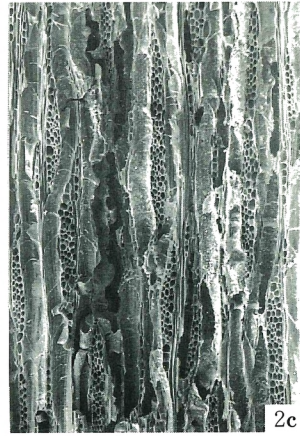
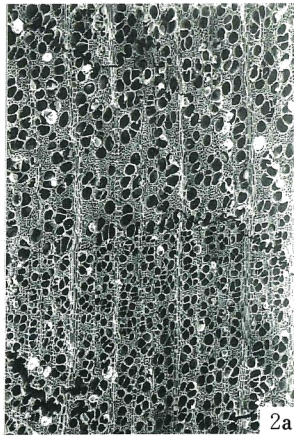
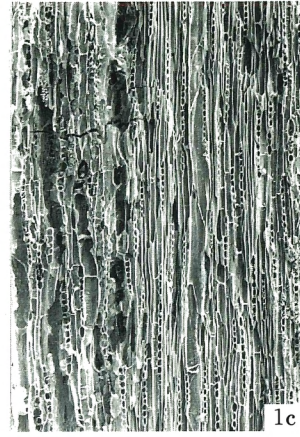
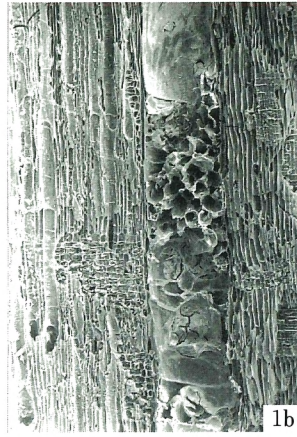
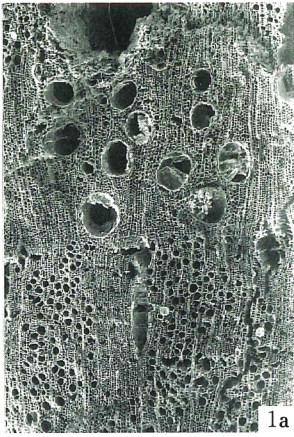
図版 20



図版説明

写真番号		地点	試料番号
1	イネ族イネ属 (葉身機動細胞由来)	S K - 1	72
2	イネ族イネ属 (葉部短細胞由来)	S K - 20	127
3	キビ族 (葉身機動細胞由来, 側面)	"	71
4	キビ族エノコログサ属 (葉部短細胞由来)	"	67
5	タケ亜科ネザサ節 (葉身機動細胞由来, 側面)	S K - 1	70
6	タケ亜科ネザサ節 (葉部短細胞由来)	"	37
7	タケ亜科 (葉身機動細胞由来)	"	"
8	タケ亜科 (葉部短細胞由来)	"	"
9	ヨシ属 (葉身機動細胞由来)	S K - 20	69
10	ヨシ属 (葉部短細胞由来)	"	127
11	ウシクサ族 (葉身機動細胞由来)	"	71
12	ウシクサ族ススキ属 (葉部短細胞由来)	S K - 1	74
13	イチゴツナギ亜科 (葉部短細胞由来)	"	39

植物珪酸体電子顕微鏡写真



図版説明

写真番号	樹種名	地点	試料番号	断面	倍率
1 a	クリ	S K-20	2	木口	× 35
1 b	クリ	〃	〃	柁目	× 70
1 c	クリ	〃	〃	板目	× 70
2 a	サクラ属の一種	S K-1	1	木口	× 70
2 b	サクラ属の一種	〃	〃	柁目	×105
2 c	サクラ属の一種	S K-20	2	板目	×105

埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書 第104集

児沢北遺跡

県立平和資料館関係
埋蔵文化財発掘調査報告書

平成3年3月20日 印刷

平成3年3月30日 発行

発行 財団法人 埼玉県埋蔵文化財調査事業団

〒369-01 大里郡大里村大字箕輪字船木844

電話 (0493) 39-3955

FAX (0493) 39-3579

印刷 関東図書株式会社